

第53回 全国青年大会 報告書

日程：2015年8月12日(水)～14日(金)

於：天城山荘 参加者数：50人(35教会)

テーマ：「共に生きる～イエス様ならどうする?～」

主題聖句：マタイによる福音書 22：34～40

マルコによる福音書 12：28～34

ルカによる福音書 24：13～35

申命記 6：4～5、10：12

レビ記 19：18

メッセンジャー：榎本讓先生(浦和キリスト教会)

～第53回実行委員会より一言～

主の御名を賛美いたします。今年は「共に生きる～イエス様ならどうする?～」というテーマで全国青年大会が開催されました。ここに書かれていることはほんの一部ですが、神様からいただいた恵みを、日本バプテスト連盟の諸教会・伝道所の皆様とも分かち合うことができたらと願います。

また、神様の大きな計画の中で、青年一人ひとりの成長のために、これからも青年大会が用いられますよう祈りに覚え、支えていただけたら幸いです。諸教会・伝道所の歩みの上に、神様の恵みが豊かにありますように。

最後に参加者一人ひとりを送り出してくださった諸教会・伝道所の皆様、大会準備に関わってくださった連盟の皆様、参加してくださった一人ひとり、また全てを導いてくださった主に、心より感謝します。

栄光在主

第53回実行委員会一同

大会理念

日本バプテスト連盟全国青年大会は、全国の教会・伝道所から送り出された青年が主イエス・キリストに倣い仕える者として成長してゆくことを目的とする。

- 1 御言葉に聴く
- 2 分かち合う
- 3 祈る
- 4 決心する
- 5 遣わされる

目次

目次	2
大会スケジュール	3
主題解題	4
青年大会開会礼拝メッセージ	5
ディボーション2日目朝	11
ディボーション3日目朝	13
スタンプラリープログラム メッセージ	16
第53回 全国青年大会協議会	20
キャンプファイヤープログラム 証	30
青年大会派遣礼拝メッセージ	41
第53回全国青年大会 感想文	45
スタッフ紹介・私たちの願いと祈り	56

大会スケジュール

	8月12日(水)	8月13日(木)	8月14日(金)
6:00		起きよ、光を放て! ～起床～	起きて床を上げよ! ～起床～
7:00	夕があり 朝があった	第2の日である。 ☆ディボーション	第3の日である。 ☆ディボーション
8:00		朝食	朝食
9:00	スタンプラリー班	☆スタンプラリー	掃除
10:00		☆写真撮影	☆派遣礼拝
11:00			また来年 お会いしましょう☆
12:00		☆協議会	
13:00		☆協賛会	
14:00	受付	☆協議会	
15:00	☆神の国は近づいた! Opening & オリエンテーション	フリータイム	
16:00	☆礼拝	フリータイム	
17:00	同世代	自由	
18:00	夕食	夕食	
19:00	体育館	グラウンド	
20:00	イエスさまなら どうするプログラム ～レク～	火の柱! ～キャンプ ファイヤー～	☆…大チャペル
21:00		私があなたの名を呼んだ ～スタッフ選出～	
22:00	フリー～ねんね～	フリー～ねんね～	

主題解題

みなさんこんにちは。いよいよ始まりました、第53回全国青年大会！どうですかみなさん、緊張感でドキドキしていますか？それとも、期待感でワクワクしていますか？ちなみに他の感情がある方いらっしゃいますか？緊張しているのは何故ですか？期待しているのはどうしてですか？僕は神様に見られている事に緊張しています。父兄参観みたいに、後ろの方に居るんです」よね…そして僕は神様がこの大会でどんな出会いを用意しているのか、ワクワクしています。それはまた新しく神様と出会えること。今まで読んだ事がある御言葉でも、新しい気付きはあるからです。「え、こんな一面があるんですか、神様。」みたいなね。それに久しぶりに会う友人との出会いも楽しみです。さらに、自分に会おう場所になるという確信があるからです。良い面、嫌な面、あるでしょう、でも両方とも祝福です。良い面に気付いたら、それは賜物ですから伸ばしていきましょう。嫌な面に気付いたら、それが今与えられている課題であると思います、向き合ってみませんか。

今大会、僕達が学びたいことは「神を神とすること」と「互いに仕えあうこと」です。そのため、はじめに、この主題解題の時間、御言葉に向かい合っていきましょう。与えられた御言葉は6つあります。しよりの2ページをご参照ください。一つずつ、みなさんで読んでみましょう。聖書をお開きください。

マタイによる福音書 22：34～40、マタイによる福音書 22：34～40

ちなみに、みなさん、聖書は何訳をもっていますか？訳の違いなどあるとおもいますが、声に出して読んでみましょう。続いてマルコによる福音書 12：28～34、ルカによる福音書 10：25～28 この共観福音書は3つとも同じテーマを扱っています。つまり、一番大事にするものはなにか、ということです。同じテーマですけれども、違いがありますね。質問者と質問の内容の違い、回答者と回答内容の違いもあります。では、残りの3つは、イエス様が引用した箇所を見ていきます。第一の掟に対応するのは申命記 6：4～5、申命記 10：12～13です。まずは、6：4～5から。第2の掟に対応するのはレビ記 19：18、レビ記、申命記を書いたのはモーセと言われています。そしてレビ記が書かれたのは紀元前1400年頃だそうです。今では3年経てば技術がどんどん革新していくこの時代に、僕たちは3400年前の話を、ばか真面目に聞いているんです。イエス様が、これが一番大事だ。と言われているから。6つ読んできましたが、『愛』という一つのキーワードが見えてきたと思います。神を神とするには、神様を愛することが重要なのはわかりました。

では、神様を愛するというのは、どういうことでしょうか？例えば、自分の価値基準と聖書から言われている事柄がぶつかったときにどちらを大事にするか？互いに仕え合うためには、隣人を自分のように愛することが重要なのはわかりました。さも当然の前提条件のように言われていますが、自分を愛せていますか？僕自身はここからのスタートです。自分を愛せてこそ、隣人を愛せるのでしょうか？もしかすると隣人を愛そうとするとところから自分を愛せるようになるのかもしれませんが。神様を愛すること、そして隣人を愛すること、この二つを意識して、三日間共に過ごしていきましょう。

『共に生きる～イエス様だったらどうする？～』

日時：2015年8月12日 16:00~17:30

メッセンジャー 榎本讓先生

マタイ5:43~48

「敵を愛することになる生き方」

大会実行委員たちが本当に苦労しながら準備し、祈ることを大切にしながら今回の大会テーマを定めた様子を少し知っている者として、実行委員たちに敬意を表したいと思います。そんなふうにして決められた大会テーマが、「共に生きる～イエスさまならどうする?～」です。そして、「共に生きる」とはどのようなことだろうかと考えるときに、「全身全霊で神を愛し、自分のように隣人を愛する」という、そのことによってのみ「共に生きる」ことができるのだろう、ということを考えて話し合い、主題聖句が定められたのだらうと思います。こうした実行委員たちの思いを汲みとりながら、参加者としてよく考え、話し合い、そこから何事かを聞き取って3日間を過ごしていけたら嬉しいと思っています。

では、「神を愛し、隣人を愛する」…そのことを、主イエスさまはどんなふうにご自身で実践なさったのか、開会に取り上げている聖書の言葉から、その事に目を向けたいと思います。

主イエスさまは、こう言われました。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい!」「隣人」という存在に対して、その一方で、自分にとっての「敵」を考えることのある私たちがいるでしょう。そんな私たちの感覚に向けて、イエスさまは、「隣人を愛して敵を憎め」というのではなくて、「隣人を愛する」というのなら、それより前に、あなたの敵を愛せ!」と言うのです。当時のユダヤ社会においては、律法が「あなたの隣人を愛しなさい」と教えていることの意味を、「隣人とは、まずはユダヤ人同胞のことだ」と解釈するのは一般的なことでした。ですから、ユダヤ人のことを迫害する存在については、それは明らかに「隣人」ではなくて「敵」と考えたはずで、当時の直接的な「敵」にあげられるのは、ユダヤを植民地支配しているローマ人であったかもしれない。しかも、それは自分たちにとって、ユダヤ民族にとって「敵」であると同時に、主なる神にとって「敵」である、というふうに普通に考えたにちがいないのです。社会的に考えて、そうした自分たちにとっての「隣人」と「敵」の存在があるという考えがあって、社会生活を営んでいたでしょう。その上で、個人的な関係としても、「自分にとっての敵と隣人」という存在を頭に置きながら生活している人々の様子もあったはずで、そして、「隣人を愛せ」という神さまの教えがあるけれども、「そうは言っても、隣人を自分のように愛するということは、なかなか、そう簡単にできないことだ」と言い合っていたに違いないのです。今日の私たちと一緒に、そのような感覚にある人々の中に、主イエスさまは、この「あなたの敵を愛せ」という言葉を投げ込んだ。「わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい!」ですから、これは、天地がひっくり返るようなチャレンジに満ちた言葉であったに違いないし、今日の私たちにとっても、そうであるに違いないと思います。でも、それは「クリスチャンというのは『汝の敵を愛せ』という崇高な教えに従おうとしている人たちのことなのでしょう?ほんとにそんなふうになっているの?偉いね～」などと言われるよう

な…そんなふうに言われることはありませんか？しかし、そういう宗教的「道徳」を、キリスト教が大事にしている、しなきゃいけない、ということとは違うのです。しかも、そういう「お道徳」というものは、少々馬鹿にしたような言い方でされるでしょう？しゃくだけど。でも、それでいて、それを言う側も、言われるクリスチャンの側も、どこか本気でそのことの意味を、自分のこととして考えようとしていないのです。本気で考えていないで、「いや、クリスチャンであってもそんな事は出来ないんですヨ。他の人と同じです。敵を愛せなんて、無理ムリ！」と言って、それで済ませてしまうのではないのでしょうか。結局、誰も本気でこの事を考えてないのだ。…「あなたの敵を愛しなさい」！これは、ただの飾りものの言葉として雲の上にも置いておく、絵に描いた餅のような「理想」として片付けられてしまう。でも、それでは何の意味もないでしょう？何故、主イエスさまが、ストレートに「愛しなさい」と命じられたのでしょうか。私達にはできないのをわかっていてあえて言われた、ということなのではないのでしょうか？

そこで、本当にキリスト教、クリスチャンの「悪い癖」と言いたくなるようなことを、ここで考えたいと思うのです。つまり、こういう論理ですぐに片付けてしまおうとするのです。「私達は、誰もが皆、罪人なのです。だから、主イエスさまが言われるような『隣人を愛する』ということは、弱い人間である私達にはできないことなのです。まして、『敵を愛する』なんてことは、到底できないのです。でも、良いのです。そんな弱い私達をも赦し、愛してくださるのが神の恵みです。十字架の愛と赦しです。しかし、その弱く貧しい私達と、神さまはいつも一緒にいてくださるのです！」それでおしまい。…どう思いますか？それでは、都合がよすぎるのではないのでしょうか。そういうことを平気で行ってしまえる感覚が教会だというのであるならば、それをどう思いますか？これがクリスチャンということなのではないでしょうか？平然とした顔で自分たちのことをこんなふうに言うキリスト教であったら、はたして世の中はそういう人々を信用するのだろうか、私は最近、つくづく考えます。少なくとも、「私は小さく弱いのです、罪深いのです」ということは、自分から堂々とと言えるものではないはずでしょう？本当に自分のことをそう感じている人は、自分から胸を張ってそんなふうには言いませんよ。くずおれるようにして、胸を打ちたたくようにして「わたしは罪人、私は弱い者」と心の中で思っているかもしれない。しかし、満足しきったような顔をして、誇ったような口調でそんなことを言うとするならば、一体どういうことなのでしょうか？私は、本当にここに大きなキリスト教の陥りがちな問題があると思う。よく反省してみなくてはいけない問題があると思います。

主イエスさまは、ここでびっくりするようなことまで言っている。「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(48節)「神さまのようになれ」と言うんですよ！主イエスさまは本気なのではないのでしょうか？それとも、最初から「できません」と私たちに言わせるために、わざわざこんなことを言ってみた、ということなのではないのでしょうか？いいえ、主イエスさまは、本気でそれを言うのです。

この48節でいう「完全な」という単語は、ギリシャ語で「テイオス」という語で、「成長し切った・終わりに達した・到達した」というニュアンスの言葉です。イエスさまが会話していた当時のアラム語に關係する、もともとのヘブル語を当てはめてみると、これは「シャルム」という語です。ヘブル語では逆にそう訳されていて、同じ単語は申命記 27:6 に出てくるのです。これは、「主の祭壇を築くときには、

掘り出した石に人がノミを入れてはならない。掘り出した時のままを使って祭壇の石として築かなければならない」という律法の規定が書かれているところに、この単語が使われています。ここで言う「完全な」という言葉が、申命記では「自然のまま」というふうに訳される言葉なのです。面白いでしょ？「完全な」と「自然のまままで」というのが、同じ単語なのです。「完全な」というと、私たちの感覚では、一生懸命に頑張っ、トレーニングを積んで、形を良くして…というイメージがある。そんなふうにして「完全な」になっていくと考える。しかし、そうではなくて、「神さまが造られたものを掘り出したそのまま」というイメージで教えられているのです。だから、聖書で言う「完全なもの」とは、もうすっかり完成されて、どこもいじるところのない姿かたちをイメージしているのではないのです。神さまが造られたまま、神が用意されたそのままの姿、ということなのでしょう。まさに「ありのままの私」ということ。「ありの～ままの～」という、あれですね。ディズニー映画で大ヒットしたんでしょう？私は観ていないのですが。アンと雪の女王…というんですか？スマップの歌でも、「ナンバーワンではなくてオンリーワン」という歌が流行りました。「ありのままの私で良い、あるがままの私が良い」なんて言うのも、ありそうですね。確かにそう言われると安心することがあるんでしょうね。それはそれで、大切なのだと思いますが、ここでもまた誤解すると、「今のままで良いのです」といって自己肯定することが、「今のままの自分を受け入れる」という言い方で開き直ってしまうことにもなりがちです。自慢げに「私は私、今のままで良いんです！」などというふうな感じになると、どこかそれも違うのではないのでしょうか。ここを注意しなくちゃいけない。神さまが造られたままの「あなた」とは、「あなた」が自分で鏡を見ながら、「私は、こういう私なのよ」と自分で決めてかかって、そこで納得してしまう、誰がなんと言おうと決めて動かない、というのとは全然違うのです。何故なら、「あなた」は生きているのだからです。生きているものというのは、一瞬々々、日々刻々と変わるでしょう？変化し、成長するのです。

使徒パウロは、「フィリピの信徒への手紙」の中で、終末に向かってキリストに仕える者として懸命に走っている姿、すでに達し得たと思っている姿ではなくて、目標を目指してひたすら全力で走っている最中の姿を「完全な者」と言っています。(フィリピ3:12~16) 完成されて出来上がってしまった者のことではないのです。止まっている存在は死んでしまったものです。生きている限り、動いて進んでいる。そうでしょう？図鑑の像の写真は、生きている本物の像ではない。標本になっている昆虫は、生きたその虫自身ではないです。生きていたら、始終動いているから、その都度いろいろ違った形になる。

「シャレム」としての「完全な者」とは、神さまによって生かされているものですから、決定してしまっ、て動かないものではない。だから、パウロも懸命に走っている最中の姿を「完全な人」だと言ったのです。動いているのですから、いつも綺麗に整っているとは限らない。でも、エネルギーが満ち溢れている。喜び、悲しみ、悩み、怒り、楽しんでその時その時の出会いに刺激されて変化していく自分…私、それが、「ありのままの私」なのです。

神の創造というのは、天地創造の最初の7日間で完了してしまっ、て、あとは大自然の流れに従って動いてきたとか、人間の手によって進められてきたとか、そういうことではないのです。イエスさまが、「私の父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」と言われた箇所があります。(ヨハネ5:17) 神は、今も生きて働いておられる。だから、その神に創られた「私」も生きて働くのです。それが

「シャレム」としての完全な者であり、「完全な者」としての「私」なのです。

そして、この「私」である「あなた」が、「あなたの隣人を愛せ」と言われています。そして、そうであるならまず、「あなたの敵を愛せ」と言われているのです。何故でしょうか？何故なら、神さまがまず、敵を愛する方、敵を愛したお方だからなのです。「自分を愛してくれる人を愛して『隣人を愛することは大切です』』と試みてきたところで、何のことはない。それならむしろ、あなたの敵を愛しなさい！」と主イエスさまは大胆に言われた。それは、「神さまがそういうお方だから、あなたもそういうふうには造られているのだ」ということではないでしょうか。

では、「敵を愛する」とは、どういうことを指して言われているものなのでしょうか。このことに関して、私には忘れられない神学生時代の思い出があります。それは、大学の特別講演会のチャペルの時間に、飯沼二郎という先生が語ってくださった話です。飯沼先生は、もう何年も前に亡くなりましたが、京都大学で農業経済を専門にしていたクリスチャンの先生です。そして、『キリスト者と市民運動』という本も書かれて、クリスチャンとして社会活動への責任を深く自覚して、それを実践してこられた先生です。その飯沼先生が、大学のチャペルで話されたのは、こういう内容でした。説教題は、「『敵』のないクリスチャン」っていうのです。しかも話の内容からすると、これは実に皮肉たっぷりの説教題なのです。「クリスチャンには、敵がない。いつもニコニコしていて『あの人は良い人だ』と思われるような人がクリスチャンだと思っているかもしれない。また、世間のイメージもそうかもしれない。しかし、私はそうではないと思います！クリスチャンには敵がある。敵が出てしまう。逆に言えば敵のないクリスチャンは、実はクリスチャンでないんだということを申し上げたいと思います」と言うのです。これが出だしの言葉でした。実に厳しい言葉ですね。そして、「主イエスが愛することをなされたように、この世の中で、この社会で、貧しくされている人々、世の力によって、差別され、抑圧されて苦しめられている人を『隣人』として愛するのであれば、イエスがそうされたように愛するならば、結局、そこで必ず壁になるようにして、そこに「敵」というものが出てくるのだ。主イエスは、結局、それで十字架刑に処せられて殺されてしまったのではないか。現代も同じなのである」と言うのです。「隣人を愛すれば、私達は十字架なんか負いたくないけれども、隣人を愛すれば、嫌でも十字架を負わされてしまうのです。十字架を私たちに負わせるもの、これが敵です」と飯沼先生は語られました。そして、「そういう現実の中に私たちがいるのだからこそ、主イエスは、『自分の十字架を負うて、私に従ってきなさい』と言われる。自分の十字架というのは、そういう具体的な、実際の苦しめる事柄を指すのです。何となく悩んでいるとか自分の弱さとか、抽象的な心の問題の事とは違うのです。『共に生きる』と決心して生きるときに起きてくる苦闘すべき現実の事です。」…こんなふうな説教です。

十字架とそれを負わせる「敵」が起きる、現れる。しかし、まさにその時にこそ、大切になってくるのが、「敵を憎め」ではなくて、「その敵を愛しなさい」という主イエスの呼びかけ、その教えなのだ」と飯沼先生は言うのです。これは、頭で考えての話ではなくて、誰かの人権のために闘い、先生ご自身が実際に市民運動の中で体験して、そこから紡ぎ出された証しの言葉だと思います。確かにそうなのです。人が人として生きられない、人として重んじられないような現実の場面がある中で、クリスチャンとして、キリストに従う者として立とうとするときに、どうしてもその「敵」と闘わなければならない。しかし、そ

れは、「敵対心」で、「憎しみの言葉」で闘うのではない。むしろ、その「敵」である相手が人間性を回復して、自分が人を抑圧しているという事実気づいて、愛する人としてよみがえるために、「敵を愛する」闘い方をしなくちゃいけないのです。神が愛しているその人として、その人も愛を持って生きられるように、神さまに造られたままの「シャレム」としての人として立てるように、その「あなたの敵」を愛するのです。それが、キリスト者としての闘い方なのだということを、この飯沼先生のメッセージから私は学んだのです。今からちょうど31年前に聞いた説教なのですが、今でも覚えていて、繰り返し思い出します。そして、これまでずっと、事ある度にこの飯沼先生の言われたことを思い出しながら過ごしてきたように思います。そして、ますます「これは本当だなあ…」と、自分もいろいろ体験するなかで、思うのです。「隣人」とは、自分の仲間のことではない。自分を愛してくれる人を「隣人」として愛しなさいと主イエスさまは言ったのではなくて、「あなたの敵を愛せ」と言われたことから考えてみると、「あなた」がその人を愛すると敵ができてしまうというのなら、その人こそが「隣人」です、ということなのです。そういう意味で、「敵」を愛するところに「隣人」を愛するというのもまた見えてくる、ということではないでしょうか。そのことをも、飯沼先生は一冊の本を著すことで示しておられました。『見えない人々 在日朝鮮人』という本です。

この本の最初のところで、飯沼先生は自分を告発するようにして書いておられる。1973年に出版された本なのですが、こういうふう書いておられます。「…わたしの目には、“抽象名詞”としての朝鮮人一般しか存在していなかったのである。しかも、まったく許しがたいことだが、それにもかかわらず、わたしは、36年間の日本による苛酷な植民地支配を、すまないことだとおもっていたのだ。イエスはいつている、『もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』』と言い張るところに、あなたがたの罪がある』(ヨハネ9:41)。“見えない人”が見えるようになるためには、ただその隣り人を、自分とおなじように、よろこび、悲しみ、なやみ、苦しむ一個の“人格”として考えること、そのことのみによる。そして、わたしに、ほんのわずかでも、“朝鮮人”が見えるようになってきたのは、偶然に、ひとりの亡命者と知りあいになったことからであった。」(『見えない人々 在日朝鮮人』 P.9-10)

今まで自分で見えているつもりでいても、頭で考えていたにすぎなくて、実際は「見えない人」だったことに気づいた、ということまで含めて厳しくご自分を告発しているのです。しかも、それが本当にわかるのは、具体的な「ひとり」と出会う体験からだけだと言われる。そのことを自分で思い知ったのだと書いておられるのです。そのことから、「見えない人々」とは、この社会によって「見えなくさせられている人々」でもあることを学んでいくのです。多くの人にとって、だから、見ようとしなければ見えない人々、そういう存在がいる、ということに気づいていかななくてはならない。それを伝え、明らかにしていかなければならなくなった、ということなのでしょう。だから、そのひとりの人権のための闘いに、自分が参加することになる。そうすることで初めて、「見えない人々」を見るようになっていくのです。

この本は、そういう闘いの歩みを自分の問題として語り出している本です。その姿の中に、私は、神さまの「シャレム」であること、というものがあるのだと思います。「共に生きる」というのは、そういう格闘のことではないでしょうか。それを簡単に「弱く貧しい人間である私には、できないのです。だから、

神さまの赦しがあるのです。だから、罪のための十字架があるのです」と言って済ましていることはできない。そこから逃げて、問題にフタをするようにしてはだめなのです。掘り出されたままの自分が格闘し続ける、というのが、「シャレム」という「完全な者」の姿のことでしょう。

私自身、在日コリアンの人の証しを通じて、こういうことを聞いたことがあります。その人が大学生の時のこと、それまで自分が「在日」であることを周囲に隠してきた。それは、韓国人であるというだけで、どれだけ差別されるかを身にしみて味わってきたからです。この日本に生まれ育ってきた体験から、彼女はずっと通名で、いわゆる「日本人名」を使って生きてきたのですが、あるとき、とても親しい友人と自分のことを隠して付き合いしていくのがつらくなって、その事に悩んで、自分が韓国人であることを明かそうと、一大決心をした、というのです。それで、あるとき、本当に勇気を出してそれを告げた、という。すると、その友人から、どんな返事が返ってきたか。「あらそうなの。わたし、全然気にしないヨ！」と。そして、その言葉に彼女は、凍り付くほどショックを受けた、という話なのです。何故だと思いませんか？「共に生きる」とは、どういうことなのかを考えさせられます。その友人は、きっと、その場を取り繕って言ったのではなくて、本当に「そんなこと全然気にしないヨ」と思って、良かれと思って、彼女にそう言ったのだろう、と思います。しかし、その言葉に打ちひしがれる程、傷ついた当人がいる。そして、彼女は、「私は気にしないヨ」ではなくて、「気にしてよ！」と叫びたかった、と言っていたのです。つまり、彼女の友人には、彼女は「見えない人々」だった、ということなのでしょうね。「ああ、在日韓国人なの。それを隠してきたからって、遠慮しなくて良いよ。悪かったなんて思わなくて良いヨ。私は今まで通りあなたをあなたとして変わらずに付き合えるヨ」という気持ちで言ったのではなかったでしょうか。そういう心で言ったのではなかったでしょうか…。そこに、実は差別の心があるのです。むしろ、どれだけ、彼女がそのことで悩んできたのか、悩まざるを得ないような日本の社会とその空気の中で「あなた」を苦しませてきたか、そんな中に平気で置かせてきたのか、と考え始めなくてはならなかったのかもかもしれません。「…ごめんね。よく話してくれたね。今まで一人で悩ませてごめんね」と感じていくことが、大事なのではないのでしょうか。その苦しみを一緒に生きよう、という心があって初めて、「共に生きる」ということが始まるのではないのでしょうか。しかも、「ごめんね」でおしまいではなくて、「ごめんね」と言わせているものと闘うことが始まる。そこがスタートだ、ということです。

この3日間の青年大会が始まりました。どんな発見があるか、考え、語り合い、逃げずに言葉を交して欲しいと思います。おかしいと思う事を、おかしいと言う。分からない事には、きちんと「私には分からない」と言う。それは、大切な「始まり」です。そこからがスタートだと思う。

最後に、ひとつのエピソードを紹介したいと思います。マザーテレサの記録映画のワンシーンなのですが、マザーテレサの修道会が、ホームレスの人たちを迎えて食事のテーブルを設ける活動に、一人の青年が参加していて、マザーに不安げに語りかける場面があったのです。彼は、「マザー、私はこのボランティアは初めてです。どうすれば良いのか、分からないのですが…、どうしたら良いのでしょうか？」と言う。すると、それに対して、マザーテレサが、さらっとこう言ったのです。「誰かの隣に座りなさい。そうすれば、自然に手が動き始めるから。」どうすればよいか、考えて、考えて、議論して、…それも大切かもしれないけれども、でも、実際に「始める」。それは、誰かがその人の隣にとにかく座る、ということな

のです。すると、必要なことが「始まる」のではないのでしょうか。「隣に座りなさい。自然に手が動き始めるから！」その事を心に刻んで、過ごしてみましょう。
祈ります。

ディボーション2日目朝

日時：8月13日 7:00~8:00

於：大チャペル

おはようございます。花小金井教会の高橋周也です。

今朝と明日の朝とは、この時間、今日と明日で2回に分けて少しだけ、「ディボーション」について、分かち合いとおすすをしたいと思います。

みなさんは、この青年大会にどのような思いをもって、参加されていますでしょうか。
どんな日常から、この天城山荘へやって来たでしょうか。
ここで新しい仲間と、そして、普段と違う仲間たちと時間を過ごす中で受け取ったこと、考えさせられていること、よくわからなかったこと・・・昨日、たくさん夜中までおしゃべりをして眠い人、もう何度も青年大会に来ている人、初めての参加で緊張している人、遠くから長い時間をかけてやって来た人は、もしかしたら少し疲れを覚えているかもしれません。とにかく、いろんな状況の人が、この同じ場所に集まっています。

今、この自分は、どんな状態でしょうか。

まずは、この自分の状態をよくよく見つめてみたいと思います。別な言い方をすれば、それは「神様、私の心を探ってください」という祈りです。姿勢を整えてもいいですし、深呼吸をしながらでもいいでしょう。

祈りながら、思い巡らしてみます。

「ディボーション」というのは、もともとは、「神への信仰」とか、「献身」という意味です。自分自身をよくよく見つめてみると、私たちが気づくのは、自分の良い姿ばかりではないかもしれません。見つめれば見つめるほど、それに気づくはずで、自分がこれがあれば大丈夫だと信じているものも、永遠のものではないかもしれません。けれども、それらを含めてこれがまるごと今の私、今日の私です。その自分として、神様に向かい合う。神様とともに時間を過ごす。
それが、ディボーションという時間です。

<夕べがあり、朝があった>

神様が世界をおつくりになった日から、ずっとずっと今この瞬間まで、そうして一日一日が繰り返してきました。

<夕べがあり、朝があった>

歴史の中で、一番重要な夜がありました。夜というよりも、闇といったほうが適切かもしれません。イエスさまが十字架につかれた出来事です。私たちの信仰は、この私を生かしてくださる愛から離れることができません。3日後にイエスさまは復活なさいました。その「復活の朝」を教会は毎年イースターとってお祝いしています。けれども、その時、誰もその復活を信じられた人はいませんでした。絶望していました。イエスさまに出会っても、すぐには気づくことができませんでした。聖書には、その様子が描かれています。ある人は、墓の前で泣き続けました。ある人は、心がたくなになり、疑いのあまり心を閉じていました。イエス様を裏切ってしまった。その後悔。十字架につけた人々への怒りもあったかもしれません。イエス様は、それでもひとりひとりに、その人がもっとも信じられる仕方で、自ら出会いに来てくださいました。

私たちは、日常生活の中で、いろいろな出来事に遭遇します。
「どうしてあの部下は、後輩は、こんなに気が利かないのか」
「この上司は、先輩は、家族は、全然自分のことをわかってくれない」
「こんなに一生懸命やっているのに、うまくいかない。どうしたらいいんだろう？」
ある人は、その現実を前にして、泣き続けるかもしれません。
人が信用できなくなり、自分の傷ついた心を心の奥底にしまいこんで、自分の殻に閉じこもってしまうかもしれない。
「人生こんなもんだろう」
ところが、今日、その私に、イエス様は自ら出会いに来てくださるのです。

ヨハネによる福音書は、「言は神であった」と記しています。
今朝私たちが手にしているこの聖書の一言一言は、イエス・キリストご自身なのです。
実は、私たちは、日々ありとあらゆることを通して神様に語りかけられています。ふつうすぐにそれに気づくことはできません。
このディボーションのとき、祈ること、聖書を読むことを通して、
またより深く、今日、この私に出会ってくださるイエス様に、
私をゆるし、愛し、生かして下さっているイエス様に、

気づかせていただけるのではないのでしょうか。

「愛しなさい」

それは、まず、主の愛をわたしたちが受け取ることから始まります。

<夕べがあり、朝があった>

今朝、この多くを抱えたまるごとの私を神様に差し出したいと思います。

今日、この時間だけではまだわからない人もいるかもしれません。

復活の日、直接イエス様にであった弟子たちですらそうだったのです。焦る必要はありません。

けれども、それでも差し出すのです。そして、問い続ける。

ある人は、「わかっただけのイエス様にわかっただけを差し出すのです」ということを言いました。

今朝は、このあと、それぞれに聖書を読み、あとで近くの人3人組で分かち合いをしてみたいと思います。ディボーションは、本来、神様との個人的な時間ですけれども、今日はここに共に集められている仲間たちとともに、ぜひ分かち合いをしてみたいと思っています。ただこれは、それぞれが聖書から、祈りから示されることですから、人に言えることもあれば、そうでないこともあると思います。それを無理に話さなくてはいけないわけではありません。

今回の青年大会では、今日のみなさんのディボーションをひとりひとり「今日のディボーションは私にとって、〇〇〇でした。」という一文にまとめていただきたいと思っています。「それどういうこと？」というツッコミはいけません。自分から、「これは、こういうことなんですよ」みたいな説明もしません。どうしても話したい人は、朝ごはんの時間に話していただければと思います。その一文を全員が2回ずつ繰り返すことをもって、わかちあいとしたいと思います。ディボーションを普段しているひともいれば、今日が初めてという人もいます。いつもディボーションで読んでいる箇所がある人は、その箇所でも構いません。特に読む箇所がない人は、しおりに載せられている聖書箇所を一緒に読んでみましょう。考えるヒントになる質問も用意していますので、必要に応じて用いてみてください。また、これは主に初心者の人向けに考えていますが、私と一緒にみんなでディボーションをしてみたいという方がいらっしゃいましたら、この後ぜひ、こちらに集まってきてください。

3日目朝 ディボーション

おはようございます。今日もディボーションについて、少しでも分かち合いとおすすみをさせていただきたいと思います。

今日も、今の自分を見つめるところから、始めたいと思います。

目を閉じて、深呼吸しても、座りなおしてもよいでしょう。

自分に一番あった形を見つけていただければと思います。

普段と違う状況に心が騒いでいる人、何か形にならない思いを抱えたひと、あるいは何か具体的な決意

を迫られている人もいるかもしれません。

心を落ち着けて、主からいただいたものとして受け取り、また、喜びとして感謝をささげたいと思います。

徹夜が2晩続いて眠い人、疲れている人は、神様に「疲れています」と、そのまま神様に祈り、差し出しましょう。

何か、繕ったり、飾りつけたりする必要はありません。

今日、私たちは、この楽しかった3日間の青年大会を終えて、天城の山を降り、また、ふだんの日常へと帰っていきます。神様に、遣わされていきます。

その日常は、どうでしょうか。

どんな思いで、そこから出かけてきたのだったでしょうか。そして、その日常は、今、何か違った見え方をするとところがあるでしょうか。それとも、変わらないままでしょうか。

そこに生かされている私として、再び遣わされていく私として、今日のこの時間を神様にささげていきたいと思います。

天城の山を降りて日常に帰ったら、その日常には、周りにクリスチャンの友達はいないかもしれません。教会に自分しか青年がいなくてもいいかもしれません。

そして実は、周りに人がいれば孤独でないかということ、そういうわけでもありません。私たちはどんな人でも、他の誰にも理解されない部分を必ず持っているからです。

それでも、私たちは覚えておきたいと思います。

私たちの信仰は、あの十字架と復活から離れることができません。

十字架でイエス様の体が裂かれ、血潮が流された。

同じ主イエス・キリストの体と血にあずかりながら、それが、この私のためだというひとつの信仰、そのたったひとつの救いに、私たちは生かされています。

イエス様は、復活してまず弟子たちに現れ、そこから教会が誕生しました。

2000年、世界中の教会で、祈りが積み重ねられてきました。

私たちは、ひとりで生きているように思っても、ひとりで祈っているように思っても、実は決してひとりではありません。

地方の教会にいたころは特にそうでしたが、私は自分がひとりだと感じて不安を感じることもよくありました。

その時に気づかされたことがあります。

祈るときには、私は、みんなと一緒にいるのです。

イエス様はいつも自分と共にいて、またイエス様はいつもここにいるみんなと共にいます。祈るとき、私はひとりだけひとりではありません。目を閉じてイメージしてみるのです。世界が広がっていく気がしないでしょうか。

本来それは、祈っている時だけではない。

常に、一日中、どんな時でも。見えないけれども、共に生かされています。

イエス様と、2000年、その世界中の祈りに執りなされながら、私たちも今朝、祈り、御言葉を読むことができます。

イエス様を死から復活させ天にまで上げた神様の力、それと同じ、想像もつかないような大きな力をもった神様が、聖霊が、この私たちの中に住んでくださっています。

その力で、私たちは今日、新しく生かされていきます。

その救いの現実のただ中で、イエス様の愛に包まれながら、今日、私は御言葉を聞きます。

ところがそれでもわたしたちは、聖書を読んでいても、よくわからないという日が続くこともあります。

それに、天城の山を降りた時、相変わらず、一日一日、いろいろな出来事に遭遇でしょう。

毎日決められた時間に起きて、それぞれの職場や学校、あるいは、それぞれに与えられた役割へと、出かけていかなければなりません。

その中で私たちは、必ず、愛したいのに愛せない自分に出会わされます。

疲れてしまって、ディボーションがしたくても、今日もできなかった、明日も続けられなかったという日が必ず来ます。正直なところ、めんどくさくて、時間はあるんだけど、youtubeを見ることがあると思います。

そんなときが来ても、私たちは覚えておきたいと思います。

私たちの信仰は、あの十字架と復活から離れることができません。

十字架は、私たちへの愛です。

自由と解放を私たちに与える力です。

だから私たちは、自分で自分に縛られる必要はありません。

順調なときにも、そうでないときにも、神様の愛はいつも私に同じように注がれています。

アダムとエバに始まり、旧約聖書で、イスラエルの民は、ずっと神様に背き続けてきました。

その民たちを愛し続ける神様の姿が証されています。

アダムとエバが樂園を追い出されるときに、服を作ったのは神様です。

荒れ野でマナを降らせたのも神様です。

そして、十字架で自ら傷つき、私たちを救いに来てくださるのが私たちの神様です。

神様が「もう知らん」と言わないのに、私たちが自分で、「聖書を読めないから、祈れないから、ディボーションできないから、愛せないから、もうダメだ」と思う必要はありません。

焦る必要はありません。

その時はきっと、神様は今よりもっと深いことを私たちに分ち合おうとくださっているのだと思います。

弟子たちの中にも、復活したイエス様に出会った途端に、イエス様の姿が見えなくなった人たちがいました

無理にわかったつもりになる必要はありません。

大切なのは、まるごとの自分を神様にそのまま差し出すことです。

「神様、私はつかれています。ディボーションが続けられません。本当は聖書がわかりません。どうして

でしょう。あの人が愛せません。どうしてでしょう。」

神様は必ず、その祈りを喜んでくださいます。

そんな神様との喜びの交わりが、私たちのディボーションになればと思います。

今日は、ぜひ天気もいいので、自分の好きな場所で、好きなように一自分の部屋のふとんのなかというのはあまりオススメしませんけれどもー

そんな時間を過ごしてみたいと思います。

そして、その喜びを誰かと分かち合うことができればと、私たちは願います。

聖書を分かち合うとき、祈り合う時、私たちは、天国での完全な交わりをこの地上にいる間に少しでも体験することができます。

イエス様の復活にであった弟子たちが、分かち合うことからそれぞれのところへ遣わされたように、今日、私たちもぜひ分かち合いをしてみたいと思います。

今回、ひとつのやり方として取り入れています。今回は、分かち合いは一文にまとめたいと思います。

その一文を今日一日中、神様からの恵みとして繰り返し繰り返し覚えながら生活したいと思うのです。

きっとその時、私たちの生活は変わっていくのではないのでしょうか。

私たちの日常は、少しずつ変化していくと思います。

イエスのいる風景、私にとってどんなものなのでしょうか。

十字架が私たちのただ中にある生き方・・・まだ私にも、それはどんなものかかはっきりとはわかりません。

しかしそれでも、今日を生きることを、今このままの私を、神様に差し出していきたいと思います。

スタンブラリープログラム メッセージ

日時：8月13日（木）11：00～11：30

於：大チャペル

マルコによる福音書12：28～34

「最も大切な掟」

こんにちは。

御言葉は集まりましたか？

皆さん1人1人に神様が素晴らしい言葉、素晴らしいメッセージを届けられたことと思います。感謝ですね。

では皆さんに集めてきた御言葉の中から、

特にマルコの福音書に焦点を当てて、さらに深くじっくりと神様の御声を聞いていきたいと思っています。

マルコによる福音書の12章28節をお開きください。

「律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスが見事に答えられたのを知って、イエスに尋ねた。『すべての命令の中で、どれが1番大切ですか。』」

この箇所はイエス様がある議論をしているのを聞いて、興味をもった律法学者がイエス様に問いかける所から始まりますね。

それまでイエス様が議論していた人達は「ファリサイ派」や「ヘロデ党」といったユダヤ教の様々な宗派の宗教指導者たちで、

イエス様を陥れるためにいろいろな話を持ち出して議論をしていましたが、見事にすべてイエス様によって言い負かされます。

ここで登場する「律法学者」は彼らとは異なり、

ユダヤ教の宗派ではなく、学問的な専門家の集まりであると考えられています。

律法の中でどの教えが最も大切かという話は

学者達のなかでよく議論される話だったらしく、

彼らはイエス様を言い負かそうとは考えておらず、単純に答えを知りたくて

問いかけたように見えます。

それに対してイエス様が答えます。

29節「イエスは答えられた。『一番大切なのはこれです。

イスラエルよ。聞け。我らの神は唯一の主である。

30節 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして

あなたの神である主を愛せよ。

31節 次にはこれです。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。

この二つより大事な命令は、他にはありません。』

この言葉はユダヤでは「シェマ」と言われる掟で、

熱心なユダヤ人は1日に2度この言葉を唱えたそうです。

つまりそれほどユダヤ人達にとってなじみ深い言葉であり、

よく知っている言葉でした。

今回、皆さんにも集めてきていただきましたが、

「レビ記」や「申命記」などにくりかえしこの言葉が登場します。

32節 「そこで、この律法学者は、イエスに言った。

『先生。そのとおりです。[主は唯一であって、そのほかに、主はない。]

と言われたのは、まさにその通りです。

33節 また[心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、

また隣人をあなた自身のように愛する]ことは

「どんな全焼の生贄や供え物よりも、ずっと優れています。」
律法学者はどのような気持ちだったでしょう？

「はいはい。わかってる、わかってる」といった感じでしょうか？
それとも

「やっぱそれだよなー！」と喜んだでしょうか？
彼がどのような思いでいたかをマルコは語りませんが、
いずれにしても彼らがよく議論していて
知りたがっていた「最も大切な掟」の答えは
みんながよく知っているものでした。

そして

34節 「イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。

『あなたは神の国から遠くない』

それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。」

という言葉で今回の箇所は締めくくられます。

今回の箇所においてイエス様が一番伝えたかったことはなんでしょうか？

また、今私達には何が語られているのでしょうか。

彼はイエス様にすでに知っていることを答え、

それに対してイエス様は彼が「賢い返事をした」と判断され、

「神の国から遠くない」と言われました。

しかし、この「遠くない」という言葉にはどのような意図があったのでしょうか？

イエス様は人々に宣教していくなかで

「神の国は近付いた」と宣言されました。

つまり、もうすでに人々にとって「神の国は遠くない」のです。

ではなぜあえてここで改めて「神の国は遠くない」と宣言したのでしょうか。

この言葉に関して、興味深い解き明かしを聞きました。

「神の国が近いかわいかわいではなく、神の国の中にいなければ意味がないのだ」
というものです。

驚きです。

つまり彼に足りないのは「神の国に到達していない」ことであるということです。

では神の国に到達するとはどうゆうことなのでしょう。

ルカによる福音書 17:20~21 にこのように書かれています。

「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、
イエスは答えて言われた。

『神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。』

「そら、ここにある」とか、「あそこにある」とか言えるものではありません。
実に、神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。』

「あなたがたのただ中に」

新共同訳では「あなたがたの間に」と訳されています。

つまり、個々人の中にバラバラにあるのではなく

私達 1 人 1 人の間に、共同体の中にあるというのです。

では、すべての共同体の中にあるのか？そうゆうわけではなさそうです。

「神の国」とは神様が統治している国です。神様のルールが支配する国です。

神様のルールとは？それが今回出てきた「掟」です。

「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして

あなたの神である主を愛せよ。

あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」

この掟に従い、神様を愛し、また互いに愛しあう 1 人 1 人の間に
来るのではなくもうすでに神の国はあるというのです。

イエス様が律法学者に「遠くない」と言われたのは

この一番大切な掟を「知っていること」ではなく

「行っていくこと」が大切だと伝えたかったのではないのでしょうか。

私達もまた問われている気がします。

神様を愛していますか？

隣人を愛していますか？

ひょっとしたら、愛せない自分と出会うかもしれません。

自分には出来ないと思うかもしれません。

だからこそそんな弱い私達を愛してくださるイエス様を見つめましょう。

イエス様こそ、この掟を実践された方です。

「友の為に自分のいのちを捨てること。これより大きな愛はない。」

イエス様は父なる神のご計画の為に、そのいのちを捧げられました。

イエス様は人々を罪から救う為、またこの「神の国の中」に招くために
十字架でいのちを捨てられました。

愛することを教えてくださるのはイエス様です。

私達を導いて下さるのはイエス様です。

イエス様が私達を愛してくださったように

私達も唯一の神様を愛し、また与えられた隣人を愛しながら

共に生きていきませんか？

第53回 全国青年大会協議会

日時：2015年8月13日(木)13:30～16:30 20:45～22:05
於：大チャペル

議場確認

仮議長：原田 賢(大宮)

規約第7条により開催を宣言。第3条を確認。受浸数43名(代議員)、参加者50名。
過半数を超えているので、開催が成立。

第一号議案 議長団選出

議長：高橋健太(横浜ニューライフ)

副議長：杉本慈恵(三鷹)

書記：永瀬一生(浦和)、小野祐基(広島)

[結果] 満場一致で承認

第2号議案 第52回会計監査報告

[結果] 賛成多数で承認

[主な議場のやりとり]

- ・加藤道彦アラン(横須賀長沢) 会計監査の結果、問題なく終えたことを報告。
- ・議長：意見
- ・原口 建(市川八幡)：青年大会終了後に、報告書ないし今後に向けての案内は出されるのか。参加していない教会にも出されるのか。
- ・原田 賢(大宮)：今回参加できなかった諸教会にも出したいと思う。
- ・議長：発言する際は名前、教会名を出して欲しい。
- ・議長：賛成する方は拍手を持って示してください。承認可決。

第3号議案 第53回決算見込報告

[結果] 賛成多数で可決

[主な議場のやりとり]

- ・加藤道彦アラン(横須賀長沢)：資料参照。現状かかっているお金と、これからかかる予定のお金を記した。今回は、パンフレット制作費はしおり作成と報告書を作成することになるため、25,000円と

した。

- 藤田琴子(恵泉)：支出、実行委員会費の宿泊費についてお聞きしたい。実行委員のメンバーではないが、前日から宿泊された方(岡田 翔)についての宿泊費用はここから出されているのか？
- 原田 賢(大宮)：実行委員会日の宿泊費から支出している。岡田 翔については、原田賢からアドバイザーとして依頼をし、当日スタッフとして立って頂くことになった為、交通費、宿泊費を支払った。
- 藤田琴子(恵泉)：経緯の説明感謝。アドバイザーというと、実行委員への助言が主な仕事。スタッフの上の立場になる。責任が伴っている奉仕ゆえに、承認が必要だったのではないか。事前の説明、連絡の共有・報告が必要だったのではないか。スタッフ選出の意味を説明していただきたい。
- 原田 賢(大宮)：ご指摘感謝。今回の件は、説明不十分であった。
- 藤田琴子(恵泉)：毎年スタッフ選出を行っている意味を確認させてほしい。
- 議長：市川八幡教会の上原美喜子さんが、体調不良のため、退席した。
よって、代議員数 42 名で議事を進めて行きたい。
- 原田 賢(大宮)：毎年スタッフ選出をする意義はあると考えている。今回の場合は、52 回大会で立候補をして選出をされたという経緯があったので、奉仕として依頼をした。
- 藤田琴子(恵泉)：2 点ある。1 つ目は質問、2 つ目は意見。1 つ目。当日スタッフ、その間のアドバイザーとしての役割も牧師の承認が合った上での役割なのか。2 つ目。これだけ関わっていたということとは、スタッフとしての責任を負っていたと言う事では。スタッフと非スタッフの線引きを明確化する必要があったのではないか。
- 原田 賢(大宮)：意見を受け止めます。
- 岡田 翔(常盤台)：修正の補足説明。牧師代表者からの承認が得られなくなったことは 間違いはない。その後実行委員会に説明した。その際、実行委員会からアドバイザーの依頼を受けたが、アドバイザーは 実行委員よりも上の立場の認識になってしまうため、断った。統一見解ができていなかった。当日スタッフに関しては、大会期間中、当日のスタッフ補佐として、参加する事を牧師に相談した結果、承認を得られたと受け止め、参加をさせていただいた。
- 藤田琴子(恵泉)：規約の中に該当者の承認を確認するという文章があるので、ある程度確認をしておく必要があったのではないか。
- 山下真実(洋光台)：意見です。教会の牧師や代表者の承認というのは、参加者だけに留まらない、形として残すことが大切だと思っている。依頼状のような形で、次の実行委員に出し、記録として残していくという方法はどうか。
- 原田 賢(大宮)：意見として受けさせていただきます。
- 高橋健太(横浜ニューライフ)：全諸教会に報告書を配布すると発言されたが、そのための予算はあるのか。
- 原田 賢(大宮)：予算的には問題ない。実行委員とアドバイザーの違いについては、責任の違いがあるのではないかと考えている。
- 森行治(宮原) 規約の文言を追加すべき。

第4号議案 第53回会計監査選出

第53回事務局長の加藤道彦アラン(横須賀長沢)より、監査人として、花小金井教会の高橋周也さんを推薦。

[結果] 満場一致で可決

第5号議案 第54回日程及び会場(天城山荘)

[結果] 第2候補の2016年8月11日(木)～13日(土)で可決

【第1候補】2016年8月10日(水)～12日(金)13名

【第2候補】2016年8月11日(木)～13日(土)23名

【第3候補】2016年8月18日(木)～20日(木)3名

[主な議場のやりとり]

- ・原口 建(市川八幡)：お盆だと休みがとれない人もいる。反対の人もいる。どういう声を聞いて、この議案を決断すればよいか？
- ・原田賢(大宮)：お盆の方が休みを取りやすいのではないかと思った。

第6号議案 第54回大会予算案

[主な議場のやりとり]

- ・山下真実(洋光台)：今年度は50名まで。70名の希望を持つのであれば、次の実行委員に向けて予算の引き継ぎを。
- ・藤田琴子(恵泉)：連盟の助成金の支えを受けて、青年大会が行われていることを感謝を持って受け止めるべき。
- ・議長：採決に入る。賛成の方は挙手を持ってお示しください。賛成多数と認めます。

第7号議案 第55回大会日程

[結果] ①と②を第55回大会の日程案として可決。

①2017年8月10日(木)～12日(土) 7 ③2017年8月14日(月)～16日(水) 13

②2017年8月9日(水)～11日(金) 27 ④2017年8月17日(木)～19日(土) 12

1人2票上位2案の採択を行い、①と②を第55回大会の日程案として可決。

本決定は来年度の協議会にて再度採決を諮る。

[主な議場のやりとり]

- ・原口 建(市川八幡)：御盆休みがいつ分からなかったのが、より分かりやすく記載してもらえると嬉しい。

- ・岡田 翔(常盤台)：確認させてほしい。第 54 回大会日程及び会場だと思うが、会場は天城山荘という認識で良いのか。
- ・原田 賢(大宮)：会場は天城山荘を予定している。
- ・高橋健太(横浜)：一人 2 票ということだが、採択した後の扱いについて教えてほしい。
- ・原田 賢(大宮)：今回選ばれた 2 つの日程を、来年度の協議会に持ち込み、そこで決定する。

第 8 号議案 第 54 回大会実行委員選出について

※22:10 より協議再開

第 53 回実行委員の木村のぞみ(大泉)より証。

大泉教会 木村のぞみ

今回は、スタッフになっての証をさせて頂きたいと思います。私は母のお腹の中にいる頃から教会に通っていて祖母、母、私の 3 世代に渡って教会に通っていました。教会は私にとって家であり、また、心の支えでもあります。51th・53thの大会のスタッフをさせて頂きましたが51thの大会のスタッフになったのは高校の時に会った「隣人に会う旅」の参加者の 1 人に「スタッフになることを考えているが迷っている。一緒に祈ってほしい」と祈りを合わせる中で導かれた事がきっかけでした。スタッフになってから受けた恵みについては、数えきれないほどあります。まず、信仰の友が与えられたこと。大会後、夜中の 1～3 時頃まで金・土などに週一は語り合い、信仰の話・恋愛の話・教会の話などくだらない話をたくさんしました。旅行に行き、1 人 1 人の教会に出席したりもしました。それまで自分の教会にずっと通っていた自分にとっては、本当に新鮮でした。今年 2 度目のスタッフをやってきましたが、この一年は本当に祈り続けた 1 年でした。週一でスカイプのミーティングをし、なかなか決まらないこともありましたが、1 人 1 人が「共に生きる」というテーマについて考え抜いた 1 年であったと思います。誰かと出会い共に生きる時、必ず相手の弱い部分、自分の絶対に変えられない弱い部分に気付かされます。そして、それを乗り越えるために試練として人や物に出会わせてくださるということを実感しています。ヨブも神様に与えられた試練の後、神様と出会うことが出来ました。試練は神様が与えて下さった恵みであると思います。そして、試練を通じて神様を求め、祈り、委ねていく、その中で今もなお生きている神様に会うことが出来ることは素晴らしい恵みであると思います。そして、試練に会った時に祈ってくれる友が与えられていることは本当に感謝です。

私は正直、自分が大会のスタッフをやることになるとは思いませんでした。初参加の時、少年少女大会とのギャップが大きく、また、年代が違いすぎて正直ついていけないと思いました。特に協議会は初参加では意味が分からず寝ていたことを思い出します。しかし、友人の信仰に励まされ、実際にスタッフとして働いてみて初めて元スタッフをやっていた方々がどれほど、この大会の為に祈り、大会に集められた 1 人 1 人と共に分かち合えたらと思って 1 年間過ごしているのか、見えない所での働きを知ることが出来ました。たった 3 日間ですが、その裏では準備の中で与えられた奉仕や試練に対して悩んだりすることが 1 人 1 人にあったと思います。けれど、その中で話し合い、分かち合い、共に生きてきた 1 年は本

当に恵みであったと思います。大会スタッフとしての奉仕にはその代によって様々なドラマがあったと思います。たった3日間の為に全国の青年のたくさんの思いや祈りが込められています。それは、自分が頑張るのではなく、たくさんの方々に祈られ、自分も神様にひたすら委ね、祈ってきた後に与えられた思いでもあります。そして参加者もまた、それぞれが全国の教会の方々から祈られて大会に送り出されて今ここにいます。たくさんの出会いと祈りの中で送り出され、こうして出会えたことに感謝します。そして、集められた青年1人1人が感じた思いや祈りの課題について、この大会が全国に祈りの輪を広げ、共に祈り合い、共に生きていく、きっかけになることを祈っています。青年大会は多くの祈りと神様の導きによってたてあげられます。全国の伝道所・諸教会の皆様にもこの大会が神様に用いられるよう祈って頂けたらと思います。

立候補者を募った。

[結果]

立候補者名

- ・西本詩生(恵泉)・金垣達也(前橋)・古田道熙(東京北)
- ・宮 旬子(志村)・原口 建(市川八幡)・山下真実(洋光台)・佐藤道子(前橋)

以上7名が議場にて承認された。

第9号議案 これからの青年大会について

大会理念の廃止、および大会の目的（大会規則第1章第2条）の改訂を提案

（※16：30で協議一時打ち切り）

[結果]

賛成 8、反対 34 反対多数により否決

議案説明：原田 賢(大宮)

しおり参照。第6号議案から第9号議案へ修正。しおり3頁「大会理念」参照。理念は時代と共に変わるもの。祈り求めて行く中で、自分達の言葉で告白するということの重要性に気付かされ、この議案を提出する。

議案内容は、

- ①「大会理念」制度そのものを廃止、「私たちの願いと祈り」を作成。
- ②「私たちの願いと祈り」は次期実行委員会に一任。
- ③今後、大会の目的として青年大会規約第1章総則第2条「本大会は、全国の教会及び伝道所から送り出された青年が主イエスキリストに倣い仕えるものとして成長してゆくこと目的とする」を表示する。

[主な議場のやりとり]

- 遠藤和義(新潟主の港)：質問。もともと大会理念は毎年変えられないものだったのか？
- 原田 賢：46回までは毎年大会理念を決めており、変えることができた。46回大会の際に現在の大会理念を制定し、毎年変わらないものとして確認をし続けてきた。
- 遠藤和義(新潟主の港)：質問。形骸化してしまう危うさもあるのでは？
- 原田賢(大宮)：そこを危惧して今回理念の廃止を提案した。
- 原口 建(市川八幡)：質問。山下さんがどのような関わり方をしたのか教えてほしい。
- 山下真実(洋光台)：本当は今回の大会に議案として個人的に提出するつもりだったが、議事運営上、共同提案という形で提出した方がよいという形になった。
- 松田智子(金沢)：現在の理念を廃止して、新たに作成するほどの説得力は感じられなかった。理念も残しつつ「私達の願いと祈り」もまた作ってはどうか？
- 原田 賢(大宮)：大会ごとに大会のテーマと「私たちの願いと祈り」を両方作成していただくことになる。
違いはどこにあるか。それは主題と信仰告白という分け方で区別する事ができると考えている。
「テーマ」は主題、「私たちの願いと祈り」については信仰告白。

• 議長

修正動議として、議案内容①について

(A案)従前の提案内容を議論していく

(B案)理念を廃止せずに(残しつつ)、「私たちの願いと祈り」を作成する

この2つを議論していく。

- 岩下星南(姪浜)：大会理念を見た時に、とてもシンプルで分かりやすかった。毎年自分達の信仰を表わしていくことも良いと思う。「私たちの願いと祈り」は枠組みを作ってしまうことになるのではないか。
- 原口 建(市川八幡)：困惑している。大会理念をなくそうと思ったきっかけのようなものがあれば紹介していただきたい。
- 原田 賢(大宮)：具体的には大会理念そのものを廃止したいと考えている。理念というものが制定されていることによって、何を大会で考えていくかを議論するための阻害になっていると感じたため。
- 原口 建(市川八幡)：意見。最終的にこの議案が通っても何も変わらないように感じている。
- 坪内彩夏(相模中央)：2008年からこの大会理念が続けられているのか、その経緯を教えてほしい。
- 杉本拓哉(宇都宮)：48回大会(2008年)の時に、この理念が両方とも可決して制定された。しかし、当時の協議会も賛成者が多かったと言うとそうではない。理念を作成した理由は、青年大会の根本的な考え方を引き継いでいくため、明文化する必要性があった。明文化する必要性の有無については、当時も賛否両論意見が分かれていく中で、可決制定されたという経緯がある。

- ・議長：今議案内容の大会理念を廃止するか否かを議論している。論点を踏まえた上で質問をお願いしたい。
- ・議長：
 - (A案)大会理念を廃止し、「私たちの願いと祈り」を作成する。
 - (B案)理念を廃止せずに残しつつ、大会ごとに「私たちの願いと祈り」と作成する
 このどちらかに賛成の挙手をお願いしたい。

(A案) 大会理念を廃止し、「私たちの願いと祈り」を作成する：12名

(B案) 理念を廃止せずに残しつつ、大会ごとに「私たちの願いと祈り」を作成する：24名

- ・議長：B案が賛成多数となり、可決された。よって、これからB案の内容について議論していく。
- ・議長：修正がある。③（今後、大会の目的として「本大会は、全国の教会及び伝道所から送り出された青年が主イエスキリストに倣い仕えるものとして成長してゆくこと目的とする」を表示する。）の大会の目的として、今あるものが理念として掲げられるので、③は削除される。よって、次の2点をこれから議論する。

- ① 「大会理念」を廃止せず、「私たちの願いと祈り」を作成する。
- ② 「私たちの願いと祈り」の内容は次期実行委員会に一任する。

- ・遠藤和義(新潟主の港)：大会理念が残るという事は、テーマと重なることにはならないか。
- ・原田 賢(大宮)：「私たちの願いと祈り」テーマを考えていく上での土台的なもの、立ち位置になると考えている。
- ・遠藤和義：テーマに対する説明文と理解してよいか。
- ・原田 賢(大宮)：今回のしおり3頁に記載している「私たちの願いと祈り」は、今回の大会理念にとってかわるものとして作成した。
- ・遠藤和義(新潟主の港)：大会理念はすべての大会を通したものの。「私たちの願いと祈り」はその都度の目標という感じ、大会理念を補佐する者としての印象を受けた。
- ・原口 建(市川八幡)：目的を毎回の大会に設定すると変えてしまった方が伝わりやすかったのではないかな。理念と「私たちの願いと祈り」、どちらが構造的に上かはっきりさせた方が良いのでは。
- ・藤田琴子(恵泉)：議事運営の際の意見です。先ほどの採決でA案、B案の2つしかなく、保留がなかった。そこは採決をとってほしい。
- ・議長：A案、B案というどちらかが決まる採決であったため、反対票を集める必要性を感じなかった。
- ・藤田琴子(恵泉)：私たちの願いと祈りに関して、作成にはどれくらいの期間を要したのか。
- ・原田 賢(大宮)：作成にはおよそ2ヶ月の期間をかけて作成を行った。

- 藤田琴子(恵泉)：2ヶ月ほどの時間をかけて用意して下さったこと、実行委員の働きを感謝したい。
「私たちの願いと祈り」に「私たち」とあるが、参加者のどれだけが「私たち」を自分の事柄として理解しているかは疑問。理念は大事であるが、プログラムの中身により時間をかけて考えていく必要性があるのではないか。
- 遠藤和義(新潟主の港)：提案。実行委員みんなで意見を合わせて、仕切り直した方が良いのではないかと。
- 議長：実行委員と話し合った結果、この場で結論を出すことは一旦止め、保留としたい。
本日夜のスタッフ選出の前に再度協議したい。しばらくの間は、意見をうかがう時にしたいと思う。
- 西本詩生(恵泉)：先ほどのA案とB案採択で、手を挙げない選択が合った。もし保留という選択があったのであれば、私は挙げなかった。納得がいかない。
- 山下真実：議事運営の提案。先ほどの、議決についてA案、B案のほかに、挙手されていなかった方も何人かいたので、取り消しを要請する。B案が可決されたことを取り消して、再度議案を再提出したい。
- 遠藤和義(新潟主の港)：A案、B案を議決し直すということか？
- 議長：まず意見として受け取り、検討をしたうえで再提出する。
- 山下真実(洋光台)：先ほどの採決の取り消しを決議した。
- 議長：先ほどの採択を取り消すことに賛成の方挙手を持ってお示しください。賛成多数と認めます。議事の展開については、一旦提案者に持ち帰っていただき、スタッフ選出の際に提案者の際に今後の展開を説明して頂く形とする。したがって、本議事は継続審議という形で処置させていただきたい。
- 議長：祈りを持って、一旦散会したい。協議会については、スタッフ選出の前に行い、今後の方向性を確認したいと思う。

協議再開 20:45～

第九号議案 大会理念取り扱いの件（提出議案の変更）

- 本議案の狙い

今の参加者の「目的」となるため 今の神様の「目的」を開くため
初めから目的の定められている、今の規約では適用できない。
そのため変える必要があると、私たちは考えています。
- 議案内容
 - ① 規約を改正し、理念を廃止し、大会の目的を大会ごとに作成する。
 - ② 大会の目的は実行委員会に一任する。
- 規約改正内容

現状

第 2 条 本大会は、全国の教会及び伝道所から送り出された青年が、主イエス・キリストに倣い仕える者として成長してゆくことを目的とする。

改正案：第 2 条 本大会の目的は、参加者の意見を募り、実行委員会に一任する。

■ 議案説明：原田 賢(大宮)：

なぜ実行委員会に一任するのか？

→実行委員会だけではなく、参加者一人一人と共に「目的」を考えていけたら理想だと考えます。

しかしその取りまとめは誰がするのか？

→実行委員会

⇒だからこそ、実行委員会に一任することを提案します。

なんのための青年大会なのか、神様の目的が成る大会となるような大会にしていきたいと願っている。そのために現在の規約を改正する必要があると考えている。

[主な議場のやりとり]

- ・ 議長：質問、意見のある方は挙手を持って示してください。
- ・ 藤田琴子(恵泉)：意見。議事を進めていく上で、賛成、反対、保留は聞いてほしい。
質問。今回改めて出された議案内容に規約の改正が含まれている。規約の内容では3分の2以上の賛成をもって可決することになるが、それで良いのか。①、②があるが、規約の改正をこれでまとめ行ってしまっても良いのか。
- ・ 原田 賢(大宮)：①、②まとめて一つの事として採決させていただきたい。別々のこととして考える一つのまとめりとして考えていただきたい。
- ・ 議長：議案の内容に規約の改正が含まれる。ゆえに3分の2以上の賛成をもって可決されることをご承知下さい。
- ・ 遠藤和義(新潟主の港)：「実行委員会に一任する」とあるが、これでは来年の参加者の意見が反映されないことになるが、それでもよいのか。
- ・ 原田 賢(大宮)：精一杯、意見を反映させたいと願っている。
- ・ 遠藤和義(新潟主の港)：「精一杯」と語られたが、具体的にどのような形なのか。
- ・ 原田 賢(大宮)：今回の場合だと、アンケートを作成し、大会終了時に参加者に配り、意見を募ることを考えている。
- ・ 遠藤和義(新潟主の港)：今年の参加者に決めさせて、来年の参加者はそれに従うという理解でよいのか。
- ・ 原田 賢(大宮)：今年の参加者に意見は募る。来年度の参加者は実行委員たちになる。今年の参加者から募った意見を、来年度の実行委員が形にしていくと言う事になる。
- ・ 遠藤和義(新潟主の港)：今年参加することができなかった諸教会の声は聞かないという理解で良いのか。

- 原田 賢(大宮)：どのように意見を募るのか、来年度の実行委員たちにも引き継いで考えていきたいと思っている。
- 岩下星南(姪浜)：プリント記載の第 2 条を変更することになる、という事で良いのか。
- 議長：議事進行のお願いをしたい。意見を言われる方は、賛成なのか、反対なのかのポジションを分かりやすくしてほしい。意見を述べる前に、賛成か反対かを答える。
- 石関かさね(浦和)：反対です。規約改正案に疑問を感じる。現状の第 2 条の文言を残して欲しい。
- 岩下星南(姪浜)：改正に反対です。規則の目的を変えてしまうと、大会の存在理由自体がなくなってしまふと考えるから。
- 上野真奈(調布南)：「主イエス・キリストに倣い仕える者として成長してゆく」ということが入ってしまったら、根本的な部分を再度見いだせなくなってしまうのではないかと
- 議長：今問うている内容は、規約の内容ではない。改めて実行委員会から提案された賛否を問うている。規約の内容については、本議案の対象の範囲外になる。
- 原田 賢(大宮)：上野さんの質疑に応答したい。私達がしていることは目的をなくすことではなく、一人一人が見出して行って欲しいとの願いを込めた。存在理由がなくなってしまうのではないかとこの意見も同じく、一人一人が見出して行って欲しいと願っている。青年大会で召された私達同士、共に主を見上げたいという願いを込めた。石関さんの質問についても同様。
- 坪内彩夏(相模中央)：質問。今議論している内容は、何に対して賛成、反対なのか教えてほしい。
- 議長：今の議案は第 9 号議案「大会理念取り扱いの件」について。「議案内容」の①、②についての賛否を問うている。
- 遠藤和義(新潟主の港)：大会の理念と名称と目的を、大会の第 2 条をもって変更するという事で良いのか。
- 高橋周也(花小金井)：反対の立場です。大会の理念は大事なものだというのが根拠。今回の実行委員が作成した「私たちの願いと祈り」も大会理念から外れていないと思う。これからも使い続けていけるには十分な理念ではないかと思う。
- 柴田佳良(横須賀長沢)：理念と目的の理解が進んでいないのではないかと思う。
- 岡村ゆり(奈良)：第 2 条改正について、反対の立場です。第 2 条の現状の文章は、第一回から今日まで、それには今後の大会まで見越した上で定められたものではないかと思う。
- 遠藤和義(新潟主の港)：質問。大会の理念と目的を撤廃して、役員に託すとなると軸足がなくなってしまふ恐れがあるのではないかと。
- 原田 賢(大宮)：そこに関してのブレーキではないが、参加者に必ず意見を募る中で決めていくという文言を規約の中に入れたい。それでどのような大会になるかは、未来の役員に委ねて行きたいと思っている。
- 遠藤和義(新潟主の港)：意見を募るが、どの意見を募らずに役員が独断で決めていくことも出来るということか。
- 原田 賢(大宮)：現在の規約だとそれが可能となる。この点においては、委ねていくしかない。

- ・森行治(宮原)：規約には「2008年8月13日より施行する」とある。これより以前は理念なしの状態でのどのように決めてきたのか教えてほしい。
- ・杉本拓哉(宇都宮)：第48回大会以前は、少なくとも自分が確認した限りでは、第27回からは、毎大会実行委員会が作成していた。大会の目的は、明文化はされていなかった。
- ・議長：採決に移ります。議場を閉鎖して下さい。採決に入る前に代議員数を確認したい。まず議場確認を行う。
- ・議長：議決権を有する者は46人。その3分の2の賛成により可決となる。したがって、31名の賛成をもって議案が賛成されることになる。

第10号議案 その他

提案事項

- ・西本詩生(恵泉)：協議会を始める前に、祈りがなかったので、今後の協議会の際には、祈りを持って進めていただければと願っています。

文責：小野祐基(広島)、永瀬一生(浦和)

キャンプファイヤープログラム 証

日時：2015年8月13日(木)19:00~20:30

於：体育館

北関東地方連合

所沢教会 根本和那

今回、初めて全国青年大会に参加し、「共に生きる」ことの大切さを学ばせていただき、感謝します。そして、これまで北関東連合の活動が守られていることにも感謝します。北関東の活動の一つには「伝道隊」があります。昨年の8月に2泊3日かけ、茨城県みぎわキリスト教会にて、伝道委員会とコラボして、伝道のお手伝いをさせていただきました。青年が中心となり、チラシ配りや若い人が参加しやすい伝道集会を開催しました。そのことにより、「共に伝道を担う」楽しさを感じられ、青年たちの信仰の成長につながっています。11月には「きたかんプレイズ」を開催しました。全年齢対象の賛美集会で、年齢関係なく50名ほど集まり、主にある出会いや交わりを喜びました。楽しい中にも「賛美って、礼拝って何だろう？」と真剣に考える時になりました。今年の5月には、「スポーツ大会」を行いました。少年少女を青年会につなげるために今年から始まったイベントです。30名程度集まり、ハレルヤゲームなどのレクやドッジボール、中線踏み、卓球のなどで汗をかき友情をかわしました。

私も去年初めて「きたかん伝道隊」に参加させていただきました。「みぎわプレイズ」ではホームカミングに来た卒園生や保護者の方を対象に放蕩息子の劇や賛美をしました。一日目の練習は恥ずかしさときこちなさがありましたが、山中先生や杉本さんの熱いご指導の下、二日目になると上達してきたと思います。そして子どもから大人まで楽しんでいただける伝道集会になりました。「ギリシャ語バイブルスタディ」では、「朽ちない冠」とは何かという問いに向き合いました。

劇やバイブルスタディを通じて、兄弟姉妹と一緒に恵みを分かち合い、あたたかい雰囲気や充実感を

感じました。私はこれまできたかんの活動や所沢教会で育てていただいたので、これからもきたかんの活動に参加し、所沢教会で礼拝を捧げ、恩返しをしていきたいと思っています。

現在、所沢教会では青年会主催のスポーツ大会やクリスマスでの劇を企画しています。劇は三浦綾子さんの『舌切り雀のクリスマス』を行う予定です。この話はすべての人が救われることの大切さを教えてください。救われたことに感謝しながらセリフの練習をしていきたいと思います。そして、兄弟姉妹と共に活動をすることで、神様のもとで共に生きる喜びや充実感を感じたいです。そして、マルコによる福音書 12 章の「隣人を自分のように愛しなさい」という御言葉を守っていきたいです。

所沢教会の祈りの課題は①神戸から所沢に来て牧会している坂本牧師と奉仕者の働きと健康が守られますように。②青年・成人科に、より多くの人が集まり、その学びが実りあるものとなりますように。きたかんの祈り課題は、大学生の参加者が増え、救いの確信が与えられることです。大学生は自分自身の信仰を見つめ直す機会になるので、連合の活動がきっかけとなればと思います。お祈り覚えていただければ幸いです。

東京地方連合

恵泉教会 西本詩生

私は恵泉バプテスト教会に転会して 8 ヶ月になる者です。今回始めて天城山荘に来て、初の青年大会の参加になります。そもそも、32 歳の私が青年会にいて良いのか、時々考えることがあります。今回参加出来たことを大変嬉しく思っています。

初参戦ということもあって、この証を依頼されて正直驚きました。僕自身性格上あまり深く考える者で無いため、すぐに「証させていただきます」と返信しました。そもそも依頼された理由の一つは申込書の「今大会チャレンジしたいこと」のらんに書かせていただいた内容だったそうです。そこには、私の今回のテーマは「透明性」と書き、詳細にも「自分の弱さをさらけ出し、神様を証できるように」と書いてしまいました。今思えば格好付けすぎたような気がします。自業自得ですね。でも、この機会を与えられたことを感謝しつつ、証の場を借りて、チャレンジさせていただきます。

2 ヶ月前のことですが、教会に時々来られる A さんと言う東京在中の九州の連盟教会員の方と大きな口論になりました。このことを通して、人を裁いている自分の心、又隣人を本当に愛すために必要な神の力を改めて気付かせていただきました。

ルカによる福音書 6 章 32、35 節、「自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している・・・あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。」

A さんは男性で、私より 2 歳ほど年上です。時々お昼ご飯の際一緒に会話するものの、親しく会話をしたことがありませんでした。自己主張が強い方で、正直私にとって非常に苦手な方です。ついにその苦手と思っている私の気持ちが表面化し、口論になりました。ある日曜日の午後、教会のことで相談を願っていることを彼から告げられ、その場におられた教会の執事さんが応答して下さいました。A さんが他の教会に通うことを考えていることを告げ、執事さんが大変残念に思い、A さんに恵泉に通い続けて欲

しいことを告げました。その後執事さんは帰宅し、私と A さんで会話を続けました。その会話の中で、彼にするどく私が聞きました、「教会に何を求めているのですか」と。彼は冷静に「メッセージを聞きに」と答えて下さいました。その後の会話は恵泉教会に通う違和感を持っていることを告げられ、その都度彼の意見を聞き入れずに、教会を弁護する形で応答していました。いろいろなお互いたまってきた時点で、彼は怒ってその場を去って行きました。しかし 5 分程してから戻ってきて、外で話したいと告げました。私はこの時点で始めて神様に祈りました。「力を与えて下さい」と。今思えば、自己しか考えていなかった祈りでした。愛の力ではなく、この世的な力を求めています。「彼を愛していません。神様、彼を愛す心を与えてください。人間を見るのではなく、お互いあなたを見る者にしてください」このような祈りを最初からささげていれば、違う方向に行ったかもしれません。結局、全く冷静な心でないまま外に行き、彼と言い合いになりました。私が「教会に何を求めているのですか」とするどく聞いたことに怒りを感じていたこと、A さんの話をその都度聞き入れずに、話をさいぎっていたこと、全てに対して怒りを感じたことを告げられました。人の話を聞く、へりくだる、謙遜な心を持つ。彼に説教をされました。真実だったため、私もますますイラつきました。いらついたなかで、気持ちが入っていないまま、彼の話を聞き入れていないことに対して誤りました。このことは彼をますますイラつかせました。その時初めて彼の目を見つめました。目の中には寂しさを見受け、彼が教会で何かを求めていることが分かりました。それなのに、彼の話を聞く耳を持たずに、神様を求める心の妨げになっていたことを気付きました。その後、口論は落ち着き、正直に話すことができました。その場でまだ悔い改めの心が無いことを正直に伝え、本当に誤るには、すなわち行動にあらわすには心が変わらなくては出来ないことを彼に伝え、不思議と彼は納得して家に帰って行きました。

私は現在恵泉教会で青年会の委員長を勤めさせていただいています。日々の朝の祈りの中で、青年会の一人一人を覚え祈っています。しかし、A さんのことはたまに祈ることがあっても、心を込めて祈っていませんでした。A さんは自分の中で危険人物と判断し、なるべく避けたい気持ちがあり、祈りにもこの謝った心が表れていました。日々の祈りの心が、生活に現れ、一つ一つ神様は自分が神に背いていることを示してくださいました。神様感謝です。

この出来事をその週の祈禱会で分かち合い、自分が悔い改められるようその会で祈っていただきました。恵泉教会の祈禱会では 2 人に分かれて祈ります。2 週間前は牧師先生とペアになり、祈り、その中で A さんが礼拝に戻ってこられるよう 2 人で祈りました。偶然かもしれませんが、その週の土曜日に A さんは夕礼拝にお見えになりました。2 ヶ月ぶりのことです。まだ日曜日の礼拝には戻っていませんが、これからも祈り続けたいものです。本当に悔い改めているか定かではありませんが、今後試されると思います。その時は最初から最後まで自己中心的な祈りではなく、神様の愛を求める祈りを持って歩みたいものです。

神奈川地方連合

横浜 JOY 教会 淵上和毅

私が就活の中で受けたことについて証します。

私は去年の 10 月頃から就活が本格的に始まりました。

私の就職先を決めるポイントは、まず、自分のやりたい仕事なのか？ということと、土日が休みということだけでした。

でも、私がやりたい仕事というのがレース関係の仕事で、土日が休みではないのに一番やりたい職種という矛盾でとても悩みました。

どちらか一方は諦めないといけない。そう思いました。

しかし現実には、レース関係の求人なんてなし。自分でフリーで探しても、どうせ受かるわけがない。と思い、自分の中で諦めることができました。

でも、そこで一番問題なのは、じゃあ、今までレース関係の職に就くと思ってずっと走り続けていた僕が行く就職先です。

うちの学校は、ディーラーに就職することを前提に勉強する学校です。ですから、ディーラーに行く人がほとんどです。接客業なので土日が掻き入れ時。休みは取れない。絶対行きたくありませんでした。かと言って、何をしたいということもなく、日に日に時間だけが過ぎて行きました。

教会の祈り会行った時、自分にふさわしい会社が与えられるように祈ってください。という祈りの課題を上げ、祈り会の皆さんに祈っていただきました。

でも、自分は祈ることをほとんどせず、教会に行っているけども、行っているだけという日々を歩んでいました。

とある日、学校で開発、生産系の説明会があるということで、それに参加しました。就職できる職種を増やすというのが一番の目的でした。しかし、そこで運命の出会いがありました。それが、内定を頂いた会社です。

この会社は主にフォークリフトなどをメインに扱っている会社で、取り扱っている車両の整備をする仕事です。営業はほかの部署がやるのでないらしく、お客様対応も法人の方との取引なのであまりなく、土日が休み。営業に飛ばされることもないそうなので、理想的な会社でした。

家族や学校の先生からは「本当にその会社で良いのか？」というような話をされました。確かにレース業界に行くと言っていた僕が、フォークリフトの整備。無理もありません。でも、それ以上に、教会に行きたい！という思いが強く、面接を受けに行きました。

しかし、そこでも問題が。面接では、役員が6人に対し、私1人という面接。もう、入った時から緊張しまくり、言葉もかみかみ。失敗しまくりました。ああ... 落ちた。と直感で思い、次の会社を探していました。でも、2週間後に内定の通知。

ありえない！と思い、進路指導の先生に聞いても、それが正式な内定だよ。と言われ、その時の感動が今も忘れられません。

結果的に土日が休みの会社というだけで探していた就活でしたが、やりたいことが詰まった会社に、就職難と言われているこの時代に一発で受かることが出来たのです。

そういえば、レース業界への夢は？と思う方もいるかと思いますが、私は2年生と3年生の時に学校行事でレーシングチームやスポンサーの方々と、サーキットと一緒にレース活動の仕事をさせていただける機会が与えられました。学校行事ではありましたが、レースの仕事にも触れられ、夢がかなったので

す！

今になって思うと、すべてのことがうまくいっていました。私がやりたかった整備業、しかも休みが土日という無謀な条件にも関わらず、それ以上にやりたいことが詰まった就職先に内定を頂き、さらにやりたかったレース業界に、学校行事という形で夢をかなえることができました！こんなことになるとは想像もしていませんでした。

マタイの福音書 10 章 27 節の「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」という御言葉が思い浮かびました。さらに内定を頂いたその週の教会の祈り会の時にこの御言葉が与えられました。

フィリピの信徒への手紙 4 章 6～7 節

どんなことでも思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリストイエスによって守るでしょう。

自分では神様に祈ることができませんでした。なぜなら、この時まで自分ってクリスチャンとして歩めているのか？と分からなくなり、とても悩んでいる時でした。この就活も神様に頼れず、自分で頑張ろうとしていました。の割には、祈ってください。とずうずうしく言っている自分がいました。やっぱり、神様に求め続けていました。日曜日休みで礼拝にというのも、それが理由だったと思います。

あの祈り会で、神様にも祈り会の方々にも打ち明けたことによって、この道が与えられたと信じています。

この出来事で、気づいたことが二つあります。一つ目は、教会の人たちや、こういった青年大会などで出会った方々に祈られているから、こうやってクリスチャンとして歩めているんだと感じました。

二つ目は、神様のことは人間の考えでは理解できない。そのことをつくづく感じました。でも、一つだけ分かったのは、神様は最善の道にずっと導いてくださっている。ということに気が付きました。うまくいなくて不安でどうしようもなかったとき、神様なんて... と思っていたときには、気が付きませんでした。でも、内定をきっかけに、あの時のあれって... と、神様の導きに今になって気が付きました。そして、すべてのことが結果的にプラスに働いていました。

これからの人生の中でどんなことが起こるか分かりません。日々神様に祈り求めつつ、どんなときにも神様の道を信じて歩いていこうと思います！！

中部地方連合

金沢教会 小林美果

今回初めて青年大会に参加させていただきました。金沢は中部の教会から遠いので、特に青年は中部地方連合の活動に参加できていないのが残念ですが、今後金沢の青年もより積極的に中部の活動に参加出来たらいいなと思います。去年9月に金沢教会で交流会があり、中部のたくさんの教会の方々に来てい

いただきました。「青少年が生き生きできる教会づくり」について学び、それぞれの教会が抱える課題やこれからどうしていくかについて話しあう貴重な時となりました。

私は高校を卒業した後、アメリカの大学に進学し、そこで日本人とアメリカ人の宣教師ご夫妻に出会い、バイブルスタディや日曜学校に参加するなかで、宣教師ご家族の優しさからイエス様の愛を知り、大学一年の時にイエス様を信じました。信じる決め手となった聖書の箇所はヘブル人への手紙 13 章の「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」というところでした。後に宣教師ご夫妻が、以前金沢教会で宣教師をされていたランドル先生に出会い、教会を紹介してもらいました。帰国後は金沢教会の教会員になり、現在は伝道執事として特伝などの行事を進めています。まだ分からないこと、悩むことがたくさんあり、よく自分の未熟さに落ち込みますが、いつも神さまが私を支え、再び立ち上がらせてくださり、田口牧師や周りの執事、教会の方々からたくさん学ばせていただいています。

現在金沢教会、富山小泉町教会の地域共同プロジェクトで、アメリカのCBFからフーシー宣教師が来られていて、月2回日曜の午後に英語礼拝があることもあり、教会には外国の方が増えています。金沢教会は大きい教会ではありませんが、神さまが必要を満たしてくださり、通訳者が私を含め4人とえられ、礼拝の通訳など宣教師の活動のサポートをしています。10年前は外国の方が数人しかいなかったのに、現在は10人以上になり、日本人への伝道や教会員の交流が活発化しています。神さまの大きなご計画の中で教会の1人1人が用いられていることを実感しています。

私自身、みこころであれば将来宣教師か、何らかの形で教会に仕える人になりたいと思っています。今年の三月に海外の宣教活動を見たいと思い、ミャンマーの日本人宣教師の方を訪ね、孤児院や教会の活動を見てきました。ミャンマーの方はクリスチャンもクリスチャンでない人も気さくで笑顔があふれていて、いい出会いがたくさんありました。海外で宣教師として働くことも祈っていましたが、今の段階では神さまは、現在の仕事を通じて神さまに仕えるように言われていると感じています。私は家庭教師をしていて、仕事上イエス様の話は直接できませんが、学生に勉強を教え、学生や保護者と関わるなかで神さまの愛を伝えていくことも与えられた尊い働きだと思っています。また執事をしながら教会の牧会に携わり、一つ一つの奉仕を忠実にすることもいつか役立つのだと思います。

今、金沢教会は、教会の老朽化のため、また近隣からの苦情なく音を気にしないでコンサートなどを行うために数年以内に新会堂建設を予定していますが、まだまだ資金が足りません。教会が新会堂建築に向けて一つとなり、新会堂が建つようお祈りいただければうれしいです。

匿名

今回、証をする場をいただき、何についてお話ししようかと考えたのですが、わたしがこの大会に参加しようと思った訳をお話させていただきたいと思います。

わたしは、両親がクリスチャンだったので、生まれたときからずっと教会に通っています。教会学校に通っていたとき、わたしといつも一緒にいてくださる神様のことが大好きになって、バプテスマを受けました。しかし、中学生になって、しばらくして、クリスチャンだということが原因で友達にバカにされたり、仲が良かった子と喧嘩してしまったこともあり、神様のことが信じられなくなりました。神様がおったら助けてくれるはずやん。聖書に書いてあることは科学的やない、嘘ばかりやん。と考

いた時もありました。その結果、神様の話を聞くのが嫌で、教会に行っても牧師先生のメッセージは聞かない、賛美歌は歌わないという状態になりました。家族全員がクリスチャンで、毎週みんなで教会に通っていたので、自分だけ休む勇気もありませんでした。このような生活がだいたい5~6年続きました。

もう一度教会につながりたい、と思い始めたのは、今年の2月にバプテスト連盟の韓国ミッションスタディツアーに参加した時です。日本が韓国にしてきたことを学んだり、韓国の教会の青年たちと交わったりする中で、この歴史の問題を聖書を通して考えたい、と思うようになりました。

が、聖書の勉強がしたいと思っても、困ることがいくつかありました。長い間教会に通っているのに聖書のことをほとんど知らないことがコンプレックスになり、他のクリスチャンの人と聖書の話をするのが怖くなっていました。この状況が少しでも変われば、とあって、今回この大会に参加してみようと思いました。同じくらいの年の人と交わることで、多くのことが学べるのではないかと思ったからです。大会の半分が終わりましたが、友達になれた人たちを通して、神様を賛美したり礼拝したり、メッセージの分かち合いをしたりすることの楽しさを知りました。クリスチャンの人との交わりの良さを実感できて、本当に良かったです。あと一日、できるだけいろいろなことを感じて、帰ってからも神様につながり続けていたいと思います。

中四国地方連合

広島教会 小野祐基

感謝をもって証をさせていただきます。私はごく一般的な家庭で育ちました。父は鉄道会社で働き、母は家事をしながら、アルバイトをして家計を支えている。そんな家庭に育ちました。

初めてキリスト教に触れたのは、中学校に入学した時のことでした。たまたま私が入学した中学校が、キリスト教主義の学校だったんです。中学3年生の時、学校中で「勝ち組、負け組」といった言葉が流行りました。優秀な成績をとれる人や能力をもっている人は将来社会人になっても良い収入が得られるから「勝ち組」、そうじゃない人は「負け組」の人生を送ることになる。勉強が苦手で、あまり良い成績を収めることができなかった私は、次第にこの価値観についていけなくなり、能力のない自分を責め、非行をするようになりました。何をしようとしても、空しさばかりを感じるようになりました。友人に対しても、疎外感だけがつのり、何のために通っているのか、人生がとてつもないものを感じていました。私は将来への希望も持てず、死ぬことさえ感じ始めました。

高校一年生になったとき、教会に通っているクリスチャンの先生と知り合いになり、「気分転換のつもりで教会に行ってみないか？」と誘われ、思い切って行ってみる事にしました。場違いだと思いながらも、日曜日、教会に行ってみると、多くの人たちが「ようこそ」と、迎え入れてくれました。自分が受け入れられている。それを感じるだけで心が安らぎました。礼拝で牧師が何を語っているのか、分かりませんでしたけど、それでも教会に通い続けてみようと思うようになりました。

通い続けて行くうちに、同じ世代の仲間ができ、教会が心を開ける場所になりました。同時に教会に通い出していることが、不思議と偶然の事ではないと思うようになっていったんです。聖書は、イエス・キリストは自分にとってどんな存在なのかと求めて行くようになりました。

ある時、教会の友達に、自分の悩みを話してみました。すると、その友達はこんな聖書の言葉を読みながら、目の前でお祈りをしてくれました。私にとっては衝撃的な体験でした。今まで生きて来て目の前でお祈りをしてもらったことがなかったからです。この友人の行動に私は突き動かされました。こんな素敵な人に自分もなりたいたいと思いました。そして、この人を突き動かしているのがイエス・キリストであるなら、純粋に自分の生き方をこのイエス・キリストにかけよう。信じてみよう、そう思ってクリスチャンになる決意をしました。

聖書を読んで行くと、イエス・キリストの生涯は常にしいたげられた人、悲しむ人々、病や障がい、職業ゆえに差別をされた人々に寄り添い続けた生涯だったのだと。そしてその姿に神様の本当の姿が表わされているのだと、教えられました。こんなもろく、弱い自分を、イエス・キリストは愛してくださる。ならば、私もそんなイエス・キリストの後ろを歩いていくような、そんな生き方をしたいと思いました。どうしようもない生き詰まりを覚えていた時、こんな私を教会が救ってくれたんです。イエス・キリストが、教会で出会った友が、私の心に寄り添ってくれたように、今度は誰かの為に寄り添う、そういう人生を生きていきたいと思い、牧師になろうと決心をしました。そして献身をし、5年間西南学院大学神学部で神学生として学びを受けました。

広島で牧師として立てられてから、来月で1年がたとうとしています。牧師としての働きを「ヒロシマ」の地で始めさせていただいていることは、私にとって大変意義深いものになっています。2年間という期間ではありますが(来年の3月で人気を終える事になりますが)、この2年間の日々が私の牧師人生の原点になります。

教会員の方の中には、被爆一世の方がいます。被爆の体験と向き合い、語り出すまでに長い年月を必要とした人が少なくありません。ある人は、「今年も原爆の日が来ます。平和記念式典に出席します。70年前のあの日を思い出すと胸が詰まる。ほんとうに悲しい、出来事だったのよ。」そう私の目を見ながら真剣に話してくださるのです。8月6日が来るのがとっても私は重苦しい。正直、はやく過ぎて欲しいって思う時がある。けど、私は決めました。神様が望んでおられないこと、戦争は二度としてはいけないんだと言う事を語ろうと決めました。」と。

着任をして、間もない日。教会員のある方が、自身が被爆した場所に案内してくださいました。その方は未だに咳が止まりません。心配をして声をかけると、「仕方がないの。これは私が生涯背負って行かなければならないものなの」といわれるんです。そして、「見て御覧」と行って「原爆手帳」を持って見せてくれました。その方の身体には、いまでも目に見えるケロイドの傷があります。負の遺産を身体に刻まれて、いまでも治療を続けている方々が、今を必死で生きておられることを感じた体験でした。

広島という地には「平和」というだけでさまざまな立場からの声があることに気付かされています。中

には、目を疑うような発言を聞く事もあります。「被爆地広島だからこそ、核兵器を平和への抑止力として作る使命をもたねばならない」、こんな声まで聞く事もあります。今年は広島に原爆が投下されてから、70年の節目の年を迎えています。集団的自衛権や、核の平和利用を求める声は未だに根強く残っています。実にさまざまな立場からの声がある中で、わたしたちはキリストに立って「平和」を考えて行こうと決意を新たにしています。「戦争が、原爆が、家族を、友人を次から次と奪っていった」ヒバクシャの方は、みんな口をそろえて語ります。8月6日が近づくと気が重くなる、そういう苦しみを、今なお第一世代の方は負い続けています。被爆者の方一人一人を覚えつつ、御言葉に耳を傾けていきたい。そう願いながら、牧会の務めを担っています。

旧約聖書、イザヤ書 11 章 6 節にこんな言葉があります。「狼は小羊と共に宿り豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち小さい子供がそれらを導く。」本来相容れないはずの二つの生き物。狼と小羊。聖書では、なんとその二つの生き物が共に宿り、小さい子供がその平和の導き手となるという、平和のイメージが語られています。私たちが知っている現実の多くは「狼は小羊を襲い、豹は子山羊を襲い、若獅子は子牛を襲う」そういう世界です。そうではない世界、強いものが弱いものを襲って、食べ物にして生きる世界から、共に生きる平和な世界、その世界を小さな子供が導く、と聖書は語っているのです。このみ言葉は、本当の平和は神様によって実現する、そう約束してくれている言葉なのだと私は思っています。

イエス様はガリラヤで出会われる人々の痛みに、誰にも言う事の出来ない、イエス様のもとにただしがみつくことでしか叫べないような深い痛みに触れてくださいました。そして神様の目に、あなたは尊いといのちに目を注ぎ、その痛みに寄り添ってくださいました。そうです、イエス様こそ「平和の君」として、私達に弱く小さないのちとつながって生きることの大切さを教えて下さったのです。

今日、私たちの住む世界は力に力で対抗していく世界になっています。報復の連鎖によって、弱い立場の人々のいのちがますます死に追いやられている世界になりました。そんな世界であって、聖書は、苦しみを負う小さないのちに目を注いでいくことが、私たちが互いの隔たりを超えて連帯し、助け合って生きていく鍵になることを教えてくれているのだと思います。被爆地に立つ教会の牧師として、平和をつくりだす一人となっていきたい。そう願っています。

福岡地方連合

古賀教会 伊藤正嗣

主の御名を賛美致します。お目にかかるのが初めての方も多くいらっしゃるかと思いますが、改めて自己紹介をさせていただきます。

私、現在、今年の4月より西南学院大学神学部で学んでおります神学生の伊藤真嗣と申します。

実はこの度、私はこの青年大会に来るのは初めてではなくおそらく5度目となります。証をするのは2度目となります。しかし前回と違って、今回は神学生としての立場なので、

今回は青年大会のテーマに絡めて、福岡地方連合や神学校の紹介を簡単に説明して、その中で私自身が与えられた証をさせていただきます。

さて、私は今年の4月までは、同じ神奈川にあります相模中央キリスト教会に通っておりまして、神奈川地方連合で青年の副会長としての活動をさせて頂きました。そこではたくさんの出会いや学びが与えられました。

福岡に来て4か月経ちようやく生活に慣れてきましたが、福岡と関東は非常に似ていることがあると感じました。福岡の人は元気で活発的です。そして江戸っ子気質と共通する、お互いを思いやるきずなが強いです。私は福岡では博多などの中心から離れた古賀教会に通っていますが、隣駅に行けば教会があるというほどに福岡には多くのバプテスト教会があり、しかも互いに密接に関係しています。福岡連合では毎週のように、何かの集会があり集まって活動しています。青年もちろん、牧師先生同士もどこの教会に集まり勉強会や聖書研究を通して情報を共有しており、牧師自身も1人の信徒としてお互いが常に牧会されている「相互牧会」「万人祭祀」という感覚が養われている環境であると感じています。私自身、福岡に来て4か月ですが、多くの出会いや刺激を与えられています。

ところでこの青年大会では、信仰の友と呼べる仲間との出会いや、毎回様々な刺激を受けています。私はかつて教会から離れていた時期もありますが、青年大会を通して再び教会に立ち返ることができた経験があります。そんな原点とも言える場所ですが、今回は少し、立場が違って神学生として、今日は現在の学びや生活を中心に証をさせて頂こうと思います。

ところで「証し」というと、皆さんどんなイメージを持たれますか？「証し」とは神様を受け入れ、教会にそして神様に、自らを告白しさらけ出しそれを公にすることです。皆さんもバプテスマ式や、様々な場所で、証をされたり、ご経験したりしたことだと思います。しかしそれは大変勇気がいることだと思うのです。その行為もそうですが、私自身、これまで何度も証をさせて頂きましたが、その度に神様に向かって告白する。私は今年度の前期に、大学内にある神学チャペルにて証とショートメッセージをさせて頂く機会を頂きましたが、大きなチャペルで、会衆がいる中でお話することはもちろん緊張して、ぶるぶると震えて何よりもまず声が出ませんでした。それはもともと緊張する性格からでもありますが、それ以上に講壇で、神さまの前で話すということは想像以上にシビアな世界だということを感じました。私は献身をする前は介護福祉士として働いておりましたが、「主のために、人のために仕えたい」、「福音を本当に必要な方に届けたい」と召命の確信を与えられました。けれども、思いだけではキリストを語ることは出来ない、そんなに甘くはないと体で実感しました。宣教や証の準備の過程では、聖書と必死に向き合い、御言葉を神さまに祈り求める、自分を削っていく作業だと思います。その中で神様と対話し砕かれることもあるでしょう。しかしキリストと出会って、御言葉を語るということを通して、私自身も開かれていく与えられる喜びを感じることが出来ます。今では聖書や神さまが近い存在となりました。と同時にこのように、神さまに公にしていく、立場に身を置くということもあらためて難しいことを実感しています。

同じようなことを、西南の大学生活で感じています。例えば、西南の神学部は、現在66名の神学生(うち24名が神学献身者コース)が学んでいます。寮生活をしながらですから、日常生活も共に学び合っているということで、正直楽しい事ばかりではなく、忍耐しなくてはならないこともたくさんあります。例えば女性には気を使わなければなりませんし、年下の方でも先輩ですから気を使います。このよう

に、寮生活では惑いも緊張も気使いもあり非常にハードなのですが、でもこの経験が本当に大切であり、将来牧会者として立たされた時に、役に立つのだらうと思います。

毎日初めて経験する神学の学びやギリシャ語など勉強はもちろん大変気を遣うことが多いです。これこそ自分をさらけ出す、訓練トレーニングする場と言っているいいかもしれません。なんでもありのままでもいいとは言いつけることはできません。私の6歳の姪っ子はアナと雪の女王が大好きで、踊ったり雪の女王ごっこをさせられたりしていましたが、でも、本当にありのままがいいのか？自分はありのまま、神様と私で、そのままがいいよ、・・・そうではなくて、今そうであるならばそれを活かして変えていく方法はないか考えてみる必要があると思うのです。それがどこに向いているか吟味しないと、(自己吟味)、新しいものは生まれません。これから牧者としてプロになる以上、どこに向いているのか御心か吟味し続けたいといけません、それは日常のことであったり、信仰生活のことであったり、すべてが関わっていることだと思います。それは例えば、勉強や人間関係において、見極める目を養われたいといけません。主が養って下さる、ですから、さきほどこの大学時代はトレーニングの場であると申し上げたのです。ちょっとでも自分の窓を開けておくことが必要。相手ではなく私たちが変わる用意が大事。その時に自分は方向に代わっていくのかというのが大切ではないかと思うのです。それは、もちろん主に向かうということです。そうすれば人間関係や寮生活でつまづきを覚えた時に、それを意識して、相手の個性や特徴に向かい合えば、それを意識して自分で吟味する習慣、癖をつける。

実は気持ちを私は切り替えるのが昔から苦手で、どうしてもこだわってしまいそのことをずっと考えてしまうところがあります。忘れたと思っても急にまた思い出し悩んでしまうのです。ただ神学校に入って学んだのは、そんな自分の生き方ではなくて、神さまの視点はどうか、神さまはどこに向いているかと常に考えていくことが大事だと考える訓練を受けているのだと思うのです。

モーセが主の召命を受けたときの出来事をそのたびに思い出します。モーセは「自分はリーダーとして立つにふさわしくない者ですから」と、しつこくしつこく主に食らい付く姿は、本当に自分と似ていると思うのです。

出エジプト記4章10節 - 17節

それでもなお、モーセは主に言った。

「ああ、主よ。わたしはもともと弁が立つ方ではありません。あなたが僕にお言葉をかけてくださった今でもやはりそうです。全くわたしは口が重く、舌の重い者なのです。」

主は彼に言われた。

「一体、誰が人間に口を与えたのか。一体、誰が口を利けないようにし、耳を聞こえないようにし、目を見えるようにし、また見えなくするのか。主なるわたしではないか。さあ、行くがよい。このわたしがあなたの口と共にあって、あなたが語るべきことを教えよう。」

「こうあるべき」「こうしなければいけない」という自分の現実を越えて、主に望みを置くそしてその環境に身を置く、そこに希望をみいだしていくこと問い続けていくことが大事だと思います。委ねること、求めることです。

ところで、話は変わりますが、私は運動が好きなので、夜はどんなに疲れていても必ずランニングをしたりして、一日のストレスを発散しています。そこである日、寮や学校の勉強に疲れて走りに行った際、辛くてもうダメかな、牧師になることは向いてないのかなとネガティブになって祈っている時、室見川の目の前の街灯電信柱がパッと光り、その瞬間線となってそれが十字架に見えました。その光は私にとってはイエスさまが照らしてくださる召命に感じました。イエス様の十字架だと思いました。どんなに疲れ自信を失っていても、イエス様は絶えず光り、導いて下さる。そのことを確信しました。

神学生は孤独との闘いです。

これからもそんな私たちをどうか、励まし祈りによってサポートしていただきたいです。これから西南での学びを続ける中で、今後もさらに主の器として用いられるように願っています。

青年大会派遣礼拝メッセージ

2015年8月14日（金）10：00～11：30

メッセンジャー：榎本 譲

於：大チャペル

ルカ 10：23～37

「行って、同じようにしなさい」

「イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。『あなたがたのしているものを見る目は幸いだ』…」（ルカ 10：23）。そのように、主イエスさまは弟子たちに言われたのです。「イエスさまなら、こういうときにはどうするだろう」と何かある度に考えて、生きて行こうとしてきていた弟子たちに向けて、言われたのです。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ」！

今、私たちは何を見ているのでしょうか？この3日間の大会で、何を見つめ、何を考えて過ごしてきたでしょうか？何を見て、「共に生きる」という大会テーマのことを心にとめたのでしょうか。もし、“あなた”が、「見た」と言えることがあったなら、それを大切にしましょう。主イエスさまは、「見たくても見ることのできない人もいるのだ」（24 節）とも言っておられます。だから、見ることができたのなら、「幸いだ」と思って良いのです。それを、ぜひ宝にしてほしい。しかも、その宝とは、隠して、自分の中にしまっておくためにいただいたものなのではなくて、「神を愛し、隣人を愛する」ために用いるための宝です。このことを3日間、みんなで一緒に考えたのです。

さて、弟子たちに向けて「見ることが出来たら幸いだ」と弟子たちに語っているイエスさまに対して、ある律法の専門家が、「イエスを試そうとして」、こんなふうに行った。「先生、何をしたら永遠の命を受け継ぐことが出来るでしょうか!？」と。この人は、律法の専門家でした。いわば“プロ”です。その人が、「イエスさま、あなたならどう考えますか？」と質問してきたのです。しかし、ここに、一つの問題点があった。律法の専門家として、聖書研究のプロ…その“プロ”であるときに、私たちは誰であっても、そこにいささかのプライドが芽生えてくるものなのです。「わたしは知っている！」という自負、その自意

識が出てくる。“プロ”は、どうしても「ある程度は、あなたよりも、私の方がわかっている！」という気持ちになっていくのです。そこに、おとし穴がある。だから、聖書は、この専門家はイエスを「試そうとして言った」のだ、と記しています。

テレビなどを観ていても、いかにも「自分の方がよく知っている」と思いながら質問するような人がいるでしょう。相手が「ちょっと、わかりませんね」と返事するのを期待してわざわざ質問する人。「これこれがどうしてこうなのか、どうですか？知っていますか？」なんて言い方をします。こういう人、私も大嫌い。そんな質問をせずに、さっさと話せば良いのに、と怒ってしまいますよね。もし、相手がちょっと違った答えを言ってもしたら、得意げになって、「ちがうですよ！」と言うのでしょ？実にいやらしいですよ。こういう人こそ、「面倒臭い」と言うのでしょ？「面倒臭い人！」ですね。みなさんは、そんなふうにならないように、よくよくご用心ください。お互いに、ですね。しかし、まさに、そんな雰囲気であのひとりの律法の専門家は「イエスを試そうとして」質問したんじゃないでしょうか。「先生、何をしたら永遠の命を受け継げると、お思いですか？あなたは、どう考えていらっしゃるのですか？」と。たぶん、イエスさまも「面倒臭いやつだなあ」と、思ったのではないのでしょうか。それで、「律法にはどう書いてあるのか？」と問い返した。「聞く前から、あなたはもう知っていると思っっているでしょ？本当にわからないから聞いている、というのではないでしょ？」と、イエスさまは見抜いておられたのだと思います。そして、「それなら、あなたの方から、その答えを、それを言ってみたら良いじゃありませんか」という感じで問い返されたのでしょ。そして、さらにイエスさまは、大切なひとことをそこに添えて、尋ねました。「律法には何とかいてあるか。（そして）あなたはそれをどう読んでいるか」！

「何と書いてあるのか」ということについては、この専門家は、ある意味で自信を持って「これです」と言えたのでしょ。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい。また隣人を自分のように愛しなさい』とあります」と。それに対して、イエスさまは、「正しい答えだ」と言われる。わかっているじゃないか、と言われる。「わたしもそう思うよ」という感じで、そのひとに返事をされたのでしょ。

しかし、はなしはそれでまだ終わっていないのです。イエスさまは「あなたはそれをどう読んでいるか？」という問い返しもされていた。ですから、ただ「ここにこう書いてあります。聖書の中で大事なものはこの言葉です」と言うだけではダメなのです。「では、あなたは、その言葉をどう読んでいますか？」という問いかけがある。「どう読むか」というのは、「どう解釈しているのか」、「どうその言葉を理解してその言葉を生きているか」ということです。「読む」とは、「生きる」ということです。「聖書を読む」というのは、「聖書を生きて」ことです。ですから、イエスさまはその専門家に、「あなたが律法の中の最も大事な教えが何であるかを知っているなら、それをどう生きているのですか？」と問われたのです。だからこそ、「正しい答えだ」と言うのに続いて、「それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」（28節）と言われたのです。「大事な神さまの教えを知っているのなら、それを生きてみればいい。とにかく、それをやってみなさい！」と、イエスさまは言われるわけです。

もし正しい答えであったとしても、ただそれをお題目のように語っているだけでは、「正しい」ことにはならないのです。正しくその言葉を生きてみることに、です。その言葉を「生きよう」としてみる時には

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中…、『…帰りがけに払います』(30節~35節)。そして、たとえで示して、イエスさまは「だれがその人の隣人になったと思う？」と彼に聞かれた。その答えは、誰でもわかる。わかるように、わざと話されたのです。だから、彼はもう逃げられない。言い逃れができなかった。「その人を助けた人です」！…正解。「そのとおり！あなたもやっごらん。」これが、イエスさまの言いたかったことです。

「あなたがたが見ているものを見る目は幸いだ！」「それを、実行しなさい。そうすれば命が得られる」…「行って、あなたも同じようにしなさい。」

ついに、このお話は終わりになります。このイエスさまの言葉によって、イエスさまの「行って、あなたも同じようにしなさい」という言葉だけを私たちの前に残して、おしまいになります。そして、私たちに「あなたはそれをどう読んでいるか？」と問いかけるのです。聖書は、「あなたは、イエスさまのこの言葉をどう生きるのか？」と問いかけて、待っているのではないのでしょうか。私たちは「神を愛し、隣人を愛する…それはできるのか、できないのか」などと、言わない方が良いでしょう。「あの人の隣人に私がならなければ」とかんで自分を追い詰めなくて良い。ただ、「見た」ならば、その「ひとりと出会った」という体験をしたならば、そこから逃げないことです。イエスさまが「それを見た目は幸い」とおっしゃるので、目をそらさないことです。多くの場合、「見なければよかったな」と思うものではないでしょうか。「出会い」って、そういうところがある。実際の「共に生きる」ということは、それほどかっこいいことを、おそらく言ってもらえないものなのではないでしょうか。飯沼二郎先生は、「実際に愛そうとするならば、かならず十字架を背負わされる体験をするだろう。それが隣人を愛することだ、愛することの証拠だ」という意味のことを言っておられます。そういうことを素通りしておいて、「神を愛します」などと言っても、うそになるだろう。「見なかった」と言って逃げない。

これは、厳しいことですね。ときに「逃げてもいいんですよ」ということを、私も大切に言うことがあります。でもね、そういうときの現場は、実際は、逃げたくても逃げられないような現実を背負い込んでいる、それがわかっている。わかっているから、本人もそれを知っているからこそ、それで苦しんでいるのを知っているからこそ、「逃げてもいいんですよ」と言うのです。「忘れたくても忘れられない」、「逃げたくても逃げられない」、だから「逃げてもいいんですよ」というその言葉をもらって、「それでも背負ってやっていこう」という思いを持たされるんじゃないのでしょうか。その言葉に励まされる…そういうことなのではないのでしょうか。そういう意味で、「逃げないでそこにいる」のです。自分を正当化するために「逃げてもいいんですよ、弱い人間なのだから、できなくていいんですよ」なんて言うのなら、「それを言っちゃ、おしまいよ！」ということになるんじゃないのでしょうか。

イエスさまの言われる「あなたがたが見ているものを見る目は幸いだ」という言葉に信頼しましょう。どうして良いかわからなくなって、不安であるときには、開会礼拝で紹介したマザーテレサの言ったことを、またここで、もう一度ご紹介しましょう。「その人の隣に座りなさい。そうすれば、自然にあなたの手が動き始める！」

祈りましょう。

第53回全国青年大会 感想文

<北関東地方連合>

新潟主の港キリスト教会 遠藤和義

第53回全国青年大会に参加して一昨年に初参加して以来の2回目の参加をしました。前は教会に行き始めて1年足らずで受洗もしていない時だったので分からない事ばかりでしたが、今回参加して大会の目的や参加者との交わり方等を知ることが出来ました。メッセージの榎本先生の在日朝鮮人の差別を受けた人との交わりの話が特に印象に残りました。また機会があれば参加したいと思います。

高崎キリスト教会 森恭子

3日間のたくさんの恵みに感謝いたします。協議会では、青年の皆さんが真剣に夜遅くまで議論しておられる姿に心打たれました。こうして議論したり、聞いたり考えたりした経験が各々の教会生活で生かされることを期待します。青少年専門委員として参加しましたが、サポートというよりも、たくさんの交わりの中で励ましを頂きました。実行委員の皆さんのお働きに感謝します。

宇都宮キリスト教会 杉本拓哉

神様に心から感謝します。全ての栄光を神様にお返しします。第54回全国青年大会のためにお祈りします。

前橋キリスト教会 金垣達也

榎本先生が「敵を愛することになる生き方」というメッセージをなさいました。その中で隣人を愛するなら敵を愛せ！や、神様のかんせいされたままほりだしたまが全なものであるなどが心にのこりました。

前橋キリスト教会 佐藤道子

今回は、「イエス様だったらどうするか」を考え続ける大切さに気づかされました。瞬間、瞬間に、出来事や状況は変わって行って、その都度「イエス様！」と考えるのは本当に難しいです。でも、次に踏み出す一歩を求めていくことを、イエス様自身が実践されたのだとも思います。そして、「イエス様だったらどうするか」を考え続けるには、イエス様をもっと知っていないとできないのでは、とも気づかされました。正直、神様の愛がわからなくて、つまづくばかりの毎日ですが、それでも、もっと神さまに愛されていると実感できるようになりたいです。今大会のために多くの助けをくださった一人ひとりに、ともに礼拝してくださった参加者の一人ひとりに、共に1年歩んでくれたスタッフ一人ひとりに、そして神さまに心から感謝します。

宮原キリスト教会 森行治

理念の廃止は却下となりましたが、大会理念を自分達で解釈するという意味で、

「私たちの願いと祈り」を生かして頂いてみたらどうでしょうか？

- ・レクはもっと短い方が良かったと思います。
- ・キャンプファイヤーの踊りはきつかったです。
- ・証は非常に良かったです。
- ・証を行いたかったです。(フリーで証を飛び込みで行える場を持って頂けたら嬉しかったかなと思います。)
- ・前までの全国青年大会とは違い、各参加者の自己紹介タイムが、ほぼなかったことが残念でした。
- ・部屋割りで、年齢が近いもの同士で固めてくれた点はとても良かったです。
- ・分団を無くした試みは良かったと思います。その結果、余裕を持って行動と、青年同士で会話をする機会が以前よりも非常に増えて良かったです。

大宮バプテスト教会 糸川慧

3日間楽しく過ごさせて頂きました。去年、訳も分からない状態で参加した、前回大会と比べ、より主体的にご用意頂いた企画に取り組むことができたと感じております。あとは、協議会での発言権、議決権を有することができれば、さらに主体的な参加ができたと悔やまれます。1年間本当にお疲れ様でした。

大宮バプテスト教会 原田賢

まず、神様が準備の1年間を守り導いて下さったこと

そして大会3日間を天城に集まった一人一人とともに、無事に過ごすことができたことに心から感謝します。

準備不足な部分や、想定外のこともあり、みなさんを戸惑わせてしまったことと思います。

申し訳ありません。

しかし、「来てよかった！」という声に本当に励まされました。

ありがとうございました。

今回の大会は本当に「愛すること」について考えさせられる大会であったと思います。

「神様を愛すること」、「隣人を愛すること」、

そして榎本先生が語ってくださった「敵をも愛すること」

簡単ではないことだけど、目をそらしてはいけないことで

真剣に向き合って、そして「実行」していかなければならないことであると

本当に学ばされました。

大会の中だけで考えるのではなくて、大会の中だけで実行するのではなくて

今、自分自身が植えられているこの「日本」という場所で

真剣に考え、実行していくこと、チャレンジしたいと思います。

皆さんは何を感じたでしょうか。何を受け取ったでしょうか。

大会は終わったけど、どこかで会って分かち合う時間が与えられたらいろいろ話したいなあと思います。

本当に集まってくださった皆さんと、送り出してくださった諸教会と必死になって大会を作ってくれた実行委員一人一人と
何よりすべてを守り導いてくださった神様に心から感謝いたします！
また来年の大会に心から期待します！

ハレルヤ！

<東京地方連合>

三鷹バプテスト教会 杉本慈恵

- ・アンケートはきちんと項目ごとに設問のあるものを用意してほしい。
- ・MC やアナウンスをするときは、マイクを使っても大きくはっきりしゃべってほしい。
- ・プログラムの流れ等もう少ししっかり打ち合わせ・把握し、MC やアナウンスの言葉選びや準備をもう少ししてほしい（途切れ途切れ、“～させていただきます、～させていただきたいと思います”等の回りくどい言い回しの頻発がすごく気になる）。
- ・もっと賛美・祈り・分かち（学び）合いがしたかった。いろいろな人のメッセージ・証が聞きたかった。
- ・時間に余裕を持ったプログラム内での学びや交わりを充実させてほしかったです（休む人は各自の判断で、と呼びかける等の配慮があればさほど負担はないと思います）。
- ・協議会での議論は時間がかかり、今回の大会＝協議会 8 割という感じ（個人的に）ですが、必要な議論だったし、いろいろな方が発言して下さり、良かったと思います。
- ・スタンプラリーはしんどかった。暑い場所で立ったまま証を聞いたり、順番待ちをしたり、探したり、集中力が散漫になってしまい、「結局なんだっけ？」とになってしまいました。
- ・協議会の意見でも出ましたが、大会の理念や実行委員の思いの込もった「願いと祈り」等が、テーマや聖句、それぞれのプログラムにどうリンクするのか、参加者が意識できるようもっと説明やアピールをしてほしいです（伝え方の工夫）。
- ・実行委員の働きに感謝します。お疲れ様でした。

大泉バプテスト教会 木村のぞみ

大会に参加して、多くの課題と多くの恵みを感じる事ができました。1年間ともに歩んでくれた神様、スタッフのみんな、また、一緒に礼拝を捧げていった参加者の皆さんに感謝します。これからそれぞれの教会に戻っても、それぞれの地で、共に神様を見上げて賛美し、礼拝を捧げていけたらと祈ります。

来年の大会も主にあってたくさんの恵みがありますように

調布南キリスト教会 上野真奈

今回印象に残ったこと。

- ・ はじめのメッセージ

「隣人を愛するときに敵ができる」ということにはっとしました。

- ・ 協議会

全員で1つのことについて真剣に考えて対立して意見を述べ合う中で互いの考えがクリアになって1つのことが決定されるという過程がすごくおもしろかったです。互いに思いやる、対立しても一致のあるいい話し合いだったと思います。

- ・ 自分の教会が元気な礼拝なので「みんな若いのにシブいなあ〜」と感動しました。

次回に期待したいこと。

- ・ 2回目も礼拝をしたいです。
- ・ メッセージをもっと聞きたいです。
- ・ 分団や知らない人と真剣に聖書について考え分かち合う時間をもっとほしいです。難なく、やっぱり時間と空間を作って集中してやりたいです。

もし、分かち合いが嫌う方がいてもフォローし合って（無理に話してもらわなくてもいいので）少し慣れてもらった方がいと思います。実行委員、スタッフの皆様、本当にありがとうございました。ハレルヤ〜！

常盤台バプテスト教会 岡田翔

第53回の全国青年大会が、神様の守りと導きの中で、皆さんと共に過ごせた事に神様に心から感謝致します。メッセンジャーとして立ってくださった榎本先生にも本当に感謝です。「共に生きる〜イエス様ならどうする〜」のテーマの中で考えさせられた3日間という短い時間ではありますが、イエス様に寄り頼んで生かされているわたしたち、日々、様々な出来事、困難に直面しながらも、愛を持って大きく包んでくださっている事、同じ空の下で命が与えられているわたしたちもまた、助け合い、寄り添い合って生きていく事、歩み寄る姿勢を自らもってイエス様に求めていき続けていきたいと思いが与えられました。み言葉によって、祈りによって、賛美によって神の愛を受け取る姿勢もまた、大切に抱き続けていかなければと自分自身の今後の課題として持つ事もでき、大切な時間・想いを与えられた事は大きな喜びでもあります。実行委員の一人一人の一年間のお働きが守られた事にも感謝します。また、天城の地で出会った信仰の友、一人一人にも感謝します。連盟の青少年専門委員の方々、天城山荘の方々、関係各所、数えたらキリがありませんが、全ての方々のお力によって青年大会が開催されていると思います。

とにかく感謝の気持ちでいっぱいです。54回の実行委員の方々、これからのお働きの上に主の豊かな守りと導きがありますようにお祈りしています。

「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」

ローマの信徒への手紙 12章 15節

志村バプテスト教会 宮旬子

スタッフのみなさんおつかれさまでした。とってもいい大会になったと思います。ほんとうにありがとうございました。

市川八幡教会 原口建

全国の青年たちとの交流・語らいは他では得難いものがあり、意義深かった。この色はこれからも強く出して頂きたい。テーマについては、聖書に聴いたプログラム作りが目に見えて思いを感じた。参加者が思うところをより深く聞く時間を持ちたかった。

市川八幡キリスト教会 嶋田健治

内輪ネタを全体のアナウンスや司会のときにもってきて、初めて青年大会に来た人や他の連合の人がどう気持ちになるか考えて欲しい。

今回はかなりチャレンジがあった大会だったと思います。分団をなくし、理念の話をし、講師をなくし、とても大会の意味を考えさせられました。私が思ったのは、分団はあった方がいいと思います。それは自分の思っていること考えていることを話す場が曖昧だったからです。自分でその場を作るとのことでしたが、それができない人もいます。実際にそういう人がいました。

やはり天城山荘は関東に近いので、内輪グループができやすい傾向があると考えます。

遠くから来た初めての人は、かなり交わりにくい環境です。その為にも分団での交わりがあったり、出会いが大切になるのではないのでしょうか。今回はチャレンジがあったからこそ分団のよさがわかったと思います。ありがとうございました。

それと、せっかくいい「共に生きる～イエス様ならどうする～」といういいテーマがあったのに、あまり、このことについて考えられなかったと思います。大会が何故あるのかという問いも大切ではありますが、そこに留まっていたは先に進めません。個人的にももっと色々な話を聞きたかったです。おつかれさまでした。

栗ヶ沢バプテスト教会 内藤潤

今回は分団がなく、分かち合いの時間をプログラムとしてあえてつぐらないということで不満があった。しかし、一人でゆっくり考える時間を持てたこと、初対面の人に話しかけ、交わりを持つようチャレンジしていったことが良かった。

さまざまな人と交わりを持てたことに感謝。

茶話会においては同世代の友人で問題やいろいろな思いをシェアし、意見の交換ができたことにとても感謝している。

「共に生きる」というのは、私にとってタイムリーな問題であった。一時の交わりで満足するのではなく、長く心をよりそわせていくようにしたい。

場面場面で、実行委員の苦勞を感じた。辛い中でも笑顔でいてくれたことに感謝です。

これから、青年として歩む中で積極的に全国青年大会に参加したいと思った。

東京地方連合 市川八幡キリスト教会 上原美喜子（匿名希望）

個人的な悩みや自分自身と向きあうことを神様、イエス様、友達に助けてもらうことが

できました。心から感謝しています。実行委員、榎本先生に感謝です。

花小金井キリスト教会 高橋周也

- ・ 完成（目的に向かって動きつづけてること）を目指して。
- ・ イエスのいる風景

この2つが深く心に刻み込まれています。

交わりを通じて、自分自身に新たに十字架を覚えさせていただきました。特に「私たちの願いと祈り」を、しおりを通じて分かち合っただけだことは大きな感謝だったと思います。色々楽しいことも多かったですが、もう少しメッセージ（礼拝の時間）や、みんなで賛美ができるプログラムがあるとよかったと思います。

ご奉仕ありがとうございました。

恵泉バプテスト教会 藤田琴子

4月から児童福祉関係の現場で働きはじめ、そこで出会う人たちとどう共に生きていくのかということが私の中で大きなテーマになっていました。

日々の忙しさの中、静まってみ言葉に聞き祈る時間が十分につくられないことにもどかしさと虚しさのようなものを感じているとき、天城の地で信仰の友と出会えたことで大きな励ましを得ました。

開会礼拝では、「ありのまま」とは動的なものであって懸命に前に進むことであると知り、共に苦闘するという共に生きるあり方を示され感謝でした。

正直なところ、もっとみ言葉を味わい、分かち合っただけならと思いましたがまた教会に持ち帰っていきたいと思います。

これからの青年大会のため、全国諸教会の青年のために祈りたいと思います。

恵泉バプテスト教会 西本詩生

神様が実行委員一人一人を用いて、皆さんが熱意を持って、喜びを持って奉仕をされていた姿がとても刺激になりました。祈りに包まれた大会であったことを実感しました。

実行委員、奉仕者の皆様本当にお疲れさまでした。

一点提案させていただきます。水曜日の夜にあった祈り合う時が木曜日にも開かれれば幸いです。

<神奈川地方連合>

洋光台キリスト教会 田村和子

～53回全国青年大会に参加して～

<榎本先生のメッセージ>

- ・ 心に突き刺さる、鋭いメッセージでした。
- ・ 特に「イエスのいる風景」というのが、今後私の課題になりそうです。

<協議会について>

・ 長時間に渡る協議会でしたが、大会の根本について、みんなで共に真剣に考えられたことが恵みだと感じました。

- ・ そして改めて、多くの青年に大会に参加して欲しいと気持ちを強めました。

<レクについて>

正直しんどかったけど、楽しかったです。分団復活希望。

<その他>

・スタッフの方々、お疲れ様でした。そしてありがとうございました。お陰様で楽しく過ごすことができました。報告書の作成、郵送などまだお仕事は残っていますが、本当に最後の最後まで業が上手くいくように祈っています。

・送り出して下さった洋光台教会の皆様、天城山荘の職員の方々、そして最初より最後までを導いて下さった天のお父様に感謝です。

～第54回全国青年大会に向けて～

<テーマ>

案ですが、“問い続ける～神様の御心とは～” でどうでしょうか？

自分もですが、洋光台キリスト教会青年会メンバーが一人でも多く参加できるようにお祈りください。

洋光台キリスト教会 山下真実

全体を通じて、とてもチャレンジの多い大会だったと思います。分団を無くし、実行委員が御言葉をとりつぐなど、新たなチャレンジに、参加者として戸惑うことも少なくなかったです。これまでの青年大会のあり方に問いかける良いチャレンジだったと思います。今後、この問いかけを受けながら、大会を更に良いものとしていくために自分にできることをしていきたいと思いました。

横浜ニューライフバプテスト教会 浦田薫

主の御名を賛美します。今回の全国青年大会に参加された方々、またスタッフ一同本当にありがとうございます。

主題聖句である「心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてあなた神である主を愛しなさい」また「隣人を自分のように愛しなさい」この二つにまざる掟は

ない。自分の信仰も信賴して共に学んでいきたいと思います。

横浜ニューライフバプテスト教会 高橋健太

・プログラム作りにおいて、準備不足というか、欠けているのでは？という視点があるように感じた。例えば人の疲れや「流れ」、「空気感」

そのような点にも配慮が必要だと思う。

・派遣礼拝は、メッセージ以外が残念だった。「応答の賛美」は、何に対する「応答」なのか、その曲から意図が伝わらない。その後の祈りの時も「自由に祈る」という環境や文化に育たなかった人にとっては何をしたら良いのか、何を祈れば良いのか、戸惑うのではないか？その辺り、祈りに導く為の配慮があればいいと思う

相模中央キリスト教会 坪内彩夏

共に生きる～イエス様ならどうする？～

すごくシンプルで、でも今までの生活で1度は考えることがあったであろうテーマ、

改めて同じ青年同士で3日間を通じて考えることができました。

またテーマだけでなく、時間をかけて大会の意義をみんなで真剣に話し合い、考えを深めることができ、改めて実行委員の大会に対する強い気持ちを感じられました。今後もこれからの実行委員そして参加者のみんながこの熱意を忘れず、神様のことばを忘れずに行動していきたいと思います。

横須賀長沢キリスト教会 加藤道彦アラン

今回スタッフとして参加させていただきました。事務局長として、スタッフの会計を担いつつも、51回の時とはまた違った恵みとなり感謝。54回の青年大会の為に祈りしております。

金沢キリスト教会 小林美果

大会のために長い間たくさんたくさん祈り準備いただいて本当にありがとうございました。皆様のおかげで色々な人から大切なことを学び楽しいときを過ごさせていただきました。

連盟の青年たちは自ら一生懸命考え論議するすばらしい青年たちだなあと連盟の将来は明るいなあと思いました。次の大会のために祈ります。

金沢キリスト教会 松田智子

まず、実行委員の兄弟姉妹に感謝の言葉を送りたいと思います。協議会を通じて実行委員の方々の思い、情熱を感じました。今回の結果は否決となりましたが、結局参加者は何のための青年大会かを真剣に考えることになりました。

これこそが本来のねらいであろう「青年大会をルーティンにしないで目的や意義を自分の頭で考えること」だと思うので、すばらしい機会を提供くださった実行委員の方に感謝します。準備の段階、また協議会の場で本当に大変だったと思います。神様が、その1つ1つの奉仕を豊かに祝福し超特大プレゼントを与えてくださいますように心からお祈りします！！

ところで、「私たちの祈りと願い」の文章はとても素敵ですね。ミッションステートメントみたい。わたしは好きですね。

<中部地方連合>

日本バプテスト四日市教会 後藤健

ご苦労様でした。スタッフの皆さん、本当にお疲れ様です。今回の大会プログラムでは改めて考え教えられました事は、やはり青年大会は分団が必要ですね！と思いました。あと、全ての参加者が健康という訳ではないので、それを考えたプログラム内容を期待します。テーマ等の希望ですが、私個人としては、具体的なものが好みます。ではスタッフの皆さまが祝され守られますように！！

<関西地方連合>

堺キリスト教会 辻本悠香

様々な新しい時を与えられました。こんなにたくさんの青年と一度に交わる時、いろいろな所から来ている人の前で証する時、奉仕する時、青年としての考えを分かち合う時と、青年大会にしかないものを沢山体験させていただきました。私は青年大会に参加することが初めてだったので、協議会に出席するのも、もちろん初めてでした。協議会って教会の新年度総会みたいなもんかな、と思っていたのですが、議案にはっきりNOと言える人がいたり、意見を述べる人がいたり、何よりもとても

長い時間をかけて新しい青年会のあり方を考えてくださる実行委員の方々がいたり、と驚くことだらけです。協議会の時間は少し長引きましたが、私にとっては、豊かな学びの場を与えていただけたと思います。1人1人が青年大会のことを本当によく考えていることが私に伝わってきました。この大会で与えられたことを、普段の生活の場に戻ってから実践できるようにします。青年として、自分と、教会の関係を考えられるようになりたいです。

奈良教会みささぎ伝道所 岡村ゆり

昔参加していたころと、同じ所もあり、違っているところもあり、けれども誠実に真摯に大会を建てあげよう作りあげようとするスタッフと参加者の姿に励まされ、なぐさめられました。協議会で1人1人に採択を願う実行委員、責任を感じながら、真剣に考え意見を述べる参加者。ぐだぐだにもなりやすいけれど、時間もかかって大変だけどこれこそバプテストだと思いました。ここを大切にしていけることが重要だなあと。ありがとうございました。

<中国・四国地方連合>

広島キリスト教会 大成佑美

テーマ「共に生きる～イエス様ならどうする～」と主題聖句6つ、多くのことを考えることの出来る良い箇所でした。

広島キリスト教会 小野祐基

大会実行委員の皆さんのお働き心から感謝します。実行委員の1人1人の働きと絆が今日までの道りにあったことを共に奉仕を担わせていただく中で交わりを共にしていく中で感じました。昨年に続き今大会に参加することが出来て本当に良かったと感じています。協議会で議論の1つになった「理念」「目的」について実行委員の声を聞く中で青年大会が今まで大切に続けてきたことや大会の歴史を学ぶことが出来ました。かつて、少年少女大会で同じ連合の少年少女会で顔を合わせた信仰の友と青年大会で再会し、祈り励まし合えるという喜びをいただきました。来年の大会もぜひ参加をしたいと思っています。

3日間のプログラムを守ってくださった主に感謝。

<北九州地方連合>

直方バプテストキリスト教会 嶋田直人

今回初めての青年大会でしたが僕にとってとても有意義なものになったと思います。全国少年少女大会よりもより深く学ぶことが出来、さらに様々な人と交流することができたことに感謝します。

<福岡地方連合>

鳥飼バプテスト教会 山下愛香

今回の青年大会は2回目だったので、顔見知りもいて、前回よりものびのびと過ごせて、神様のことについてじっくり考えられました。ですが今回の分団がないというのは、1年目の人にとっては仲間作りが難しいのではないかと感じました（年上のフォローもあまりなかったように見えたので…）。あと、メッセージやスタンプラリーの後に分かち合いをしなければ、受けた内容を自分の中で消化しきれ

なかった部分もあったので、話し合うための時間をもう少しとって下さると嬉しいです。ですが、少ない時間の中でも神様の愛について考える時間が持てたので、分かち合いの大切さを感じました。

また、参加費などですが、学割か早割などがあると、新しい人がもっと増えるかなと思います。

協議会が長かったり、筋肉痛になったりと大変なことも多かったです、1つ1つがとても良い経験になりました。やはり、神様と面と向かって向き合える、信仰の友と再会できる青年大会はいいなあと思いました。また来年も参加したいです。第53回実行委員さん…青年大会をありがとうございました！

福岡城西キリスト教会 原田翼

今回は安保関連法案のことや、沖縄の基地問題等があり、少しモヤモヤした気持ちのまま青年大会に来てしまいました。今回の学びの中で「敵を愛することになる生き方」「共に生きること」という内容にとても考えさせられています。今の世の中で、イエス様ならどうするか、これからのために自分で出来ることは何かクリスチャンとして生きるとはどういう事か短い時間の中で様々な分かち合いが出来ました。これから自分の教会に帰って学んだことをどうするか今の世の中で今回学んだ事、考えた事をどう行動に移すか、まだ答えらしい答えは出ていませんが、これからも考え続けようと思います。

思いを尽くし、精神を尽くして神を愛し、隣人を自分のように愛するこの2つの掟を忘れず、教会に関わっていきこうと思います。ありがとうございました。

長住バプテスト教会 宇野豪人

今回のプログラムは新たなチャレンジが多くて戸惑うこともあったが、そのチャレンジしようとした気持ちに感謝したい。こんなキャンプもありだと思った。

分かち合いは自主性に任せていたけれど、それは顔なじみの人としてしまうことが多かったから分かち合いはしっかりグループを作ってしてほしいと思った。

今回も恵み多きキャンプになりました。ありがとうございました。

鳥栖キリスト教会 大里奏

私は、全国青年大会に参加するのは今回で2回目でした。前回の大会の印象はわりと若者が多く活発な感じだったけれど今回は人数も少なかったのもまた、一味違った雰囲気でも最初とても緊張した。

しかし少人数であったからこそ、1人1人と触れあう機会が多かったのもよかった。榎本先生のメッセージの中では、いくつかの聖書箇所からイエス様の愛などについての話を聴くことができた。そこで得られた私のこれからの課題は私の敵…というより苦手だったり

その合わない人のことをまず知ること、そして、その上でどのように愛し、接していけばいいのかだと思った。敵を愛する、ということは本当に難しいし、心から嫌悪感をもってしまう時もあるかもしれないけれど、それでも「愛そう」という意志をもち続けることが大切だと思った。最後に一年間大会を一生懸命作ってくださった役員さんと神様に本当に感謝です。

匿名希望

「共に生きる」とは何だろう、「私にとっての隣人とは誰だろう」という問いかけを持ち参加させて頂きました。本当に様々な出会いと学びに恵まれた3日間でした。

特に協議会など時に揺らされ熱い議論の中で互いに違いを越えて理解し話し合う事が出来ました。

「私たちはキリストにあって同じ景色を見る」榎本先生のお話を通じて自分たちの弱さや違いを越えて、答えは分かりませんが目標に向かって共に歩いていく必要があると感じました。青年大会で出会った全ての友、隣人とともに生き、一緒に喜ぶことに主に感謝しつつこれからも主の器として用いられたいと願っています。

匿名希望

委員の皆様本当にお疲れ様でした。準備から実行まで苦勞の一端を伺いました。忍耐と体力、主の御業で乗り越えられたことと思います。しばらくまだお仕事が残ってらっしゃることと思いますが、ゆっくり休まれてください。奉仕の方々が多くおり、この青年大会が成り立っている一面がございますが、突然の奉仕願いに驚かれた方もいらっしゃったようです。一度は、委員、奉仕者一同で決起集会の様な時を持たれると良いのかもしれませんが。

匿名希望

役員の皆様お疲れさまでした。来年の青年大会の為に祈り覚えさせていただきます。

匿名希望

音楽の今回の選曲がどれも歌詞とメロディーが良かったです。奉仕して下さった方の「You raise me up」も初めて聞きました。スタンプラリーは青年大会に何回か参加していますが、初めてで新鮮でした。各ポイントで担当の方の聖書のお話を（スタンプを押すだけだと思っていましたが）じっくり聞いて良かったです。

スタッフ紹介

原田	賢	(大宮バプテスト教会)
杉本	拓哉	(宇都宮キリスト教会)
木村	のぞみ	(大泉バプテスト教会)
佐藤	道子	(前橋キリスト教会)
加藤	道彦アラン	(横須賀長沢キリスト教会)

私たちの願いと祈り

神様と大会

—青年大会は自分達の大会ではなく、神様が創り上げる大会である。

- だからこそ、私達は主を畏れ、主を愛し、主と共に歩みます。

私達と大会

—青年大会を建てあげる為、私達一人ひとりが召されている。

- 召された私達は、青年大会を通し、共に主を見上げ、主を礼拝します。

神様と私達

—青年大会を通して神様から私たちに出会いが与えられる。

- 御言葉—その日、その時に与えられるあらゆるものから示される御言葉と向き合います。
- 隣人—神様から与えられた出会いの中で、主にあって愛し、共に生きたいです。
- 自分自身—神様から示される、偽りのない私との出会い、その中で神様に立ち返ります。

第53回全国青年大会スタッフ一同

- 今回大会の表紙は、水野創造（福岡ベタニア教会）さんに作成して頂きました。